



始

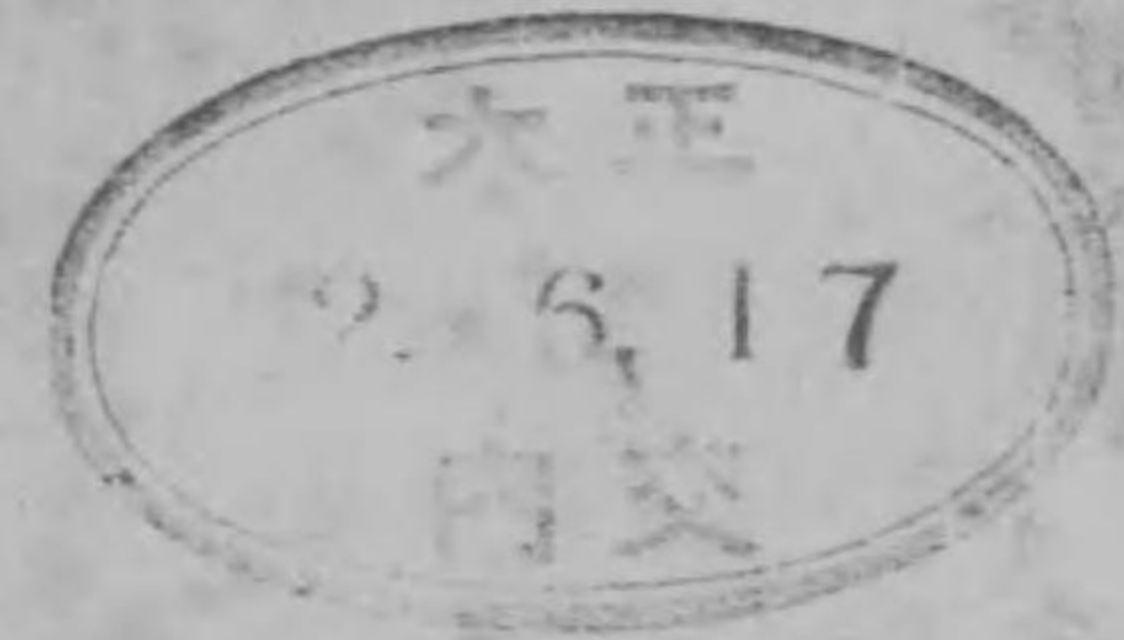


88
354

特 276
392

初等
英文法彙

宮井安吉述



東京
農藥房發行

275

88-354

小 引

自分は嚮きに英文法邦語新講義といふ一書を著し、書肆をして中學卒業或はそれ以上の英學生に提供せしめたが、更に地方の中學教員及生徒より同種類の書で少し程度の低い三四年級の参考に適したものを編述して貰ひたいとの要望もあり、書肆裳華房よりも同様の望があつたから、去秋少閒を得たを機として此一編を述作した。僅かに四百頁にも足らざる小冊子ではあるけれども、精讀したら多少の裨補になると確信する。編述者として言ふべき事は下の數事である。

一、此編は中等學校三四年級或は之と同程度の學力の生徒に參考補習の用をなすものである。

二、此編を讀み了てなほ不足を感じ、或は中學五年級程度の學力が出來たら、英文法邦語新講義を讀んで研究の歩を進めて貰ひたい。專

門家にあらざる限りは、英文法の知識は此二書で不足のない筈である。

三、本書を読む人は必ず書中の練習問題に就き一々解答を作り、巻末の附録にしてある解答と照合せて充分の考究を積んで貰ひたい。

大正二年初夏

著 者 識

目 次

| | |
|--|----|
| 第一講—總論 | 1 |
| 一、語—英語—語の規則—文法—英文法..... | 1 |
| 二、詞—二十六字母—音節—文—八品詞..... | 3 |
| 第二講—八品詞 | 9 |
| 名詞—代名詞—形容詞—動詞—副詞—前置 詞—接續詞—間投詞—八品詞の分類..... | 9 |
| 練習問題(一)..... | 11 |
| (二)..... | 13 |
| (三)..... | 18 |
| (四)..... | 20 |
| (五)..... | 27 |
| (六)..... | 30 |
| (七)..... | 34 |
| (八)..... | 36 |
| (九)..... | 40 |
| 第三講—文の類 | 45 |

| | |
|--|-----|
| 文—主辭—叙述辭—動詞—形容辭—目的辭— 補辭—單文—複文—雜文—宣明文—疑問文— 命令文—感嘆文..... | 45 |
| 練習問題(十)..... | 51 |
| (十一)..... | 54 |
| (十二)..... | 59 |
| (十三)..... | 63 |
| (十四)..... | 68 |
| (十五)..... | 72 |
| (十六)..... | 84 |
| (十七)..... | 91 |
| 第四講—八品詞の分類..... | 93 |
| 一、名詞..... | 93 |
| 練習問題(十八)..... | 106 |
| 二、代名詞..... | 109 |
| 練習問題(十九)..... | 114 |
| 三、形容詞..... | 115 |
| 練習問題(二十)..... | 126 |
| 四、動詞..... | 128 |
| 練習問題(二十一)..... | 147 |

| | |
|------------------|-----|
| 五、副詞..... | 149 |
| 練習問題(二十二)..... | 159 |
| 六、接續詞..... | 160 |
| 練習問題(二十三)..... | 166 |
| 第五講..... | 168 |
| 一、詞の文法變化..... | 168 |
| 二、名詞の變化..... | 170 |
| 練習問題(二十四)..... | 172 |
| (二十五)..... | 176 |
| (二十六)..... | 180 |
| (二十七)..... | 186 |
| 三、代名詞の變化..... | 188 |
| 練習問題(二十八)..... | 201 |
| 四、形容詞の變化..... | 202 |
| 練習問題(二十九)..... | 214 |
| 冠詞—冠詞の意味と用法..... | 216 |
| 練習問題(三十)..... | 226 |
| (三十一)..... | 248 |
| (三十二)..... | 259 |

五、動詞の變化..... 261
 練習問題(三十三)..... 266
 (三十四)..... 291
 (三十五)..... 301

六、副詞の變化..... 302

第六講—前置詞の意義用法..... 305
 練習問題(三十六)..... 334

附録

練習問題解答..... 339

初等

前記

英文法講義

第一講

總論

*This is a
Watabe.*

12 | 30
 350
 36
 19半

一、語—英語—語の規則—
文法—英文法

一 語—人は他の動物と違って、言葉を以って己の思ふ事感ずる事見聞する事を言ひあらはす力を持って居る。而して其の言葉を一つに合せて之を語といふ。語は國々或は土地土地によって色々に違って居る、即ち日本には日本語があり、支那には支那語があつて、其の音や調子や又之を書きあらはす文字が皆違

國—

も國語も英語では *lan'guage* (ラングエヂ) といふ。

二 英語——英國人の使用する語は英語である。此の語はまた英國の諸領屬地と亞米利加合衆國にも通用する。英語では此の國語を稱して *Eng'lish lan'guage* (イングリッシュ、ラングエヂ)、また略して *English* といふ。

三 語の規則——語は吾々人間の思ったり感じたり或は見聞したりする事を他の人に傳へる符牒である、シルシである、故に吾々の間にきまつた規則とか申合せとかいふべきものがなくては互ひに意が通じないことになる。そこで吾々が日々口に言ひ筆に書く言葉には規則があつて、字の讀めない者に至るまで口でいふ言語中に知らず知らずの間に其を守つて居る。此の申合せとか規則とかいふものを一つにまとめたものが即ち文法である。文法は文典ともいひ、英語では *gram'mar* (グランマ) といふ。

四 文法——この故に文法は一の語を正しく語り正しく書くことを教へる學である。

五 英文法——語は既に述べた通り國々土地

土地によって互に違ふから、随つて其の規則即ち文法も一々違つて居る。即ち日本語には之に特有の文法があり、佛や獨には佛獨に特有の文法がある。英文法即ち *En'glish gram'mar* (イングリッシュ、グランマ) は英語を以つて正しく語り正しく書く法を教ふる學である。

二、詞—二十六字母—音節—

文—八品詞

六 詞——吾々の言葉や文章は詞即ち *word* (ワッド) で成立つ。例へば

犬が吠える。

といふ言葉は「犬」と「が」と「吠える」と三つの詞で出来て居る。之を英語で書けば

The dog barks.

となり、三つの詞で成立つて居る。

「吠える」

書いたら、同じ字が集って居ても何の意味もあらはれないから、詞にはならないのである。

七 二十六字母—英語の a, b, c 等二十六文字は前にいった通り詞の素(もと)であるから之を字母といふ。英語では *letter* (レター) と稱へる。D も o も g も皆 *letter* である。二十六の *letter* を一つに合せて *alphabet* (アルファベット) といふ。日本の五十音といふが如きものである。つまり *alphabet* は二十六字母の總名であつて、*letter* は一つ一つの名である。

八 音節—一つの詞の中にも切れ目があつて二段三段或は五段六段にも分ける事が出来るものがある。例へば *full* といふ詞は少しも切れ目がなくて分ける事が出来ないけれども、*beau-*

、如きは *beau* と *ti* と *ful* と三段に分れる。こ

を音節といふ。英語では *syllable* (スィ

、る。節

あるが、英語を學ぶ者には大切な事であるから、學校の教科書についてよく調べる事が肝要である。又字書には一々 *syllable* の切れ目が示してあるから、わからない場合には其の詞を引いて見るがよい。

○【注意】二音節或はもっと長い詞を書き其の行の終りに至り書き切れぬ時にむを得ず一部分を次ぎの行にくり越すあるが、其の時に打切る處は必ず音節と音節の境でなくてはならぬ。例へば上に擧げた *beautiful* といふ詞を書く際に

The tree-peony is the most beau

とまでは書いてその後が書けなくなつたら、*beau* の後に (-) 即ちハイフン (*hyphen*) を附けて *tiful* を下の行へ送るのである。又 *beauti* まで書けたら *ful* だけを下の行へ送り越すべきものである。即ち *beautiful* は *beau* と *ti* と *ful* の三音節に分れるのであるから、若し切るならば

の次か、*ti* の次か、或は *ful* の次で切らなくならん、其の他の處で切ることは決してれない。故に詞を切るには音節をよく居なければならぬ。

九 文——吾々の談話や文章は前に言った通り詞即ち *word* で出来るのであるが、さて其の詞が幾つとなく列ねられて談話や文章になるかといふに決してそうではない。詞が少きは三、四つ多きは四十も五十も續いて、そこで一旦切れ、また幾ばくか續いて再び切れる。かくの如く切れ目から切れ目までの詞の聚合を文といふ。英語では之を *sentence* (センテンス) といふ。

Tom is a good boy. (トムは善い男の兒だ) He is eight years old. (トムは八歳である) He is very tall for his age. (トムは年の割合ひに身長が餘程高い) His father is an Englishman, and he came over to this country last year. (トムの父は英國人であつて、彼は去年我國へ渡來したのである) の如きは甚だ簡単な文章ではあるが、切れ目が三箇所にあつて、全體が四つの文より成立つて居る。

文は如何に短くてもまとまった意味がなくてはならない。何事をいふのか意味のわからぬ

詞の聚合は文ではない。

I fond apples. (私好き林檎)

は詞の集合したものであるが、英語としても日本語としても意味を完全にあらはして居ないから、文にならない。之を完全な文にするには *am* と *of* を加へて、

I am fond of apples. (私は林檎を好いて居ます、即ち林檎が好きです)

と言はねばならない。故に

文は詞の聚合して一のまとまった意味をあらはすものである。

十 八品詞——文の中の詞のならば方は文法の教へる規則によるべきものなることいふまでもない。その規則を知るには先づ詞の性質種類を呑みこんで置くことが必要である。之を知つて居ない人には規則を説明しても解せられないからである。さて英語に使用する詞は

るが、其れを使ひ方と性質と僅かに一類になる。其

の名は

- 一 名詞 *noun* (ナウン).
- 二 代名詞 *pro'noun* (プロナウン).
- 三 形容詞 *adjective* (アヂェクティブ).
- 四 動詞 *verb* (ヴァーブ).
- 五 副詞 *ad'verb* (アドヴァーブ).
- 六 前置詞 *prep'position* (プレポジション).
- 七 接續詞 *conjunc'tion* (コンジャンクション).
- 八 間投詞 *in'terjection* (インタージェクション).

である。此詞の八種類を文法上に八品詞即ち *the eight parts of speech* と稱へる。

これより次講に於て八品詞のどんなものであるかを一つ一つに説明する。

第二講

八品詞

名詞—代名詞—形容詞—動詞—副詞
前置詞—接續詞—間投詞—八品詞の分類

十一 名詞——物の名を凡て名詞即ち *noun* (ナウン)といふ。但し此の「物」といふ事は形の有る物即ち木や石や動物や人をいふのみならず、形が無くて吾々の心で有ると思ふ物までも指すのである。即ち心・悲・喜・感心・親切・心配などの名も名詞である。行・業などいふものの名も亦名詞である。次に幽霊・鬼の如き實際に於て存在しないと思はれるものでも、既に或る人が有る物と思つて名を附けた以上は、その名稱は矢張り名詞である。又人名……
る。下に挙げる詞は皆名

有形生物の名詞

- dog (犬)
- tree (木)
- crow (鳥)
- rock (岩)
- water (水)
- paper (紙)
- coat (上衣)
- food (食物)
- letter (詞) (手紙)
- ghost (幽霊)

無形物の名詞

- kindness (親切)
- anger (怒)
- hunger (飢)
- sorrow (悲)
- cold (寒氣) (風邪)

行・業などの名詞

- walk (散歩) (歩行)
- swimming (游泳)
- drawing (圖畫)
- study (研究)
- tour (旅行)

地名の名詞

- America (アメリカ)
- England (英國)
- Tōkyō (東京)

人名の名詞

- Satō (佐藤)

名詞の定義—名詞は事物の名てあ

る。

練習問題

下の文につき名詞を指示せ。(答附録にあり)

1. Tom is a very good boy.
2. I was born in the city of Kyōto.
3. The snow ceased when day broke.
(夜が明けた頃に雪が止んだ)
4. The orphan is a child whose parents are dead.
(孤とは両親の亡くなった子供のことで)
5. I shall never forget his kindness.
6. The wind blew hard, and the waves ran high.
7. Here a great battle was fought three hundred years ago.
8. Give me
9. The post
(郵便局は公園)

(正成は後醍醐天皇の御代に居た忠義な
大將であった)

十二 代名詞——吾々が人や物の話をする時
に最初は其の人或は物の名を言ふかも知れな
いけれども、其の後は幾度も同じ名を繰返して
言ふのは面倒でもあり句調も悪いから、之に代
ふべき詞を用ひる。日本語の「あれ」「それ」「これ」
「彼奴」「吾」「貴様」「貴兄」などの類である。例へば佐
藤といふ人が伊藤といふ人に向つて近藤といふ
人の事を話して、

僕は近藤に本を一冊貸して置いたが、君彼
に逢つたらそれが入用だから返して呉れと
いつて呉れ給へ。

といふべき處を、

佐藤は近藤に本を一冊貸して置いたが、伊
藤が近藤に逢つたら本が入用だから返して呉

へ。
なるのみならず、却つて
らう。故に「佐藤」の代りに「僕」

「伊藤」の代りに「君」「近藤」の代りに「彼」「本」の代り
に「それ」を用ひるのである。この類の詞を代名
詞即ち *pro'noun* (プロナウン) といふ。英語には
代名詞が日本語よりも餘程多い。下に擧げて
あるのは其の主なるものである。

| | | |
|-------------------|---|------------------|
| I (吾) (私) (僕) | \ | them (彼等を) (彼等に) |
| you (汝) (お前) (君) | | this (これ) |
| he (彼) (あの人) (あれ) | | (that) (あれ) |
| her (あの人の) (あの女に) | | which (それ) |
| my (僕の) (私の) | | who (その人が) |
| its (其れの) | | who? (誰が) |
| us (吾々を) (僕等に) | | what? (何が) (何を) |

代名詞の定義—代名詞は事物の名
に代用する詞である。

練習問題

=

つぎの詞を

2. Which do you like better, pears or grapes?
3. What have you got in your basket?
4. Is this your father's hat?
5. It was 7 o'clock when I set out.
6. The world in which we live is a round ball.
7. I don't see my shoes. Where did you put them last night?
8. The orphan is a child whose parents are dead.
9. Both Hana and her sister are out. I think they are gone to the theatre.

(芝居へ行って居ると思ひます)

10. That is just what I want.

(それは丁度私の欲しいと思つて居るものです)

十三 形容詞——人や物の性質、状態、数量をあらはし名詞代名詞に添へて用ひる詞を形容詞と云ふ。Adjective (アデキティブ) といふ。こゝに性質と云ふは人の善悪、物の長短などのみならず、色、大きさ、重さをも含み、状態といふは物の有

様の事、「新しい」「幸なる」「悲しい」「静かな」「獨り」などいふ有様をいふ。下に擧げるのは形容詞である。

性質をあらはす形容詞

| | |
|----------------|----------------|
| good (善い) (良い) | smooth (なめらかな) |
| pretty (美しい) | sweet (甘い) |
| ugly (みにくい) | weak (弱い) |
| cold (寒い) | thick (厚い) |
| slow (遅い) | little (小さい) |
| light (軽い) | huge (巨大な) |
| kind (親切な) | long (長い) |
| poor (憐れな) | white (白い) |
| soft (柔かな) | black (黒い) |

状態をあらはす形容詞

| |
|--------------|
| angry (怒つたる) |
| quiet (静かな) |
| new (新しい) |

a few (少数の)

ten (十の)

some (若干の)

a hundred (百の)

This (この) that (あの) の如く何れであるかを指し示す詞も名詞の前に使ふ時には形容詞である。

形容詞は前にもいった通り名詞や代名詞に伴ってその性質・状態・数量をあらはすのであるが、その場合に形容詞は名詞を形容するといふ。例へば

He has got three large apples. (彼は三個の大

きな林檎を得た、取ち持っている)

といふ文章に於て three と large といふ形容詞は名詞 apples に伴って之を形容して居るのである。然し形容詞は必ずしも名詞の前に置かれなくて、少しく離れた處に用ひられる事が

へば

He is growing a

名詞 he と離れて置かれてゐる。

形容詞の定義—形容詞は名詞・代名詞に附隨して物の性質・状態・数量をあらはし物を指示するに用ふる詞である。

形容詞が名詞や代名詞に附隨してその人或は物の性質や数量などをあらはす時に、文法上ではその形容詞がその名詞又は代名詞を形容するといふ。

Tom is a very good boy.

He has two younger brothers. (あの人は弟が二人ある)

Give me a larger one. (もっと大いのを私に呉れ)

に於て形容詞 good は boy を形容し、形容詞 younger は brothers を形容し、larger は one を形容して居るのである。

冠詞は皆な形容詞の中に入れられる。其れは何故かと云へば a, an は「一つ」といふ意味に使ふから數量をあらはし、the は「かの」「あの」など、暗に指示する用をなすからである。一例を擧げるならば

The principal of our school is a perfect gentleman.

(我が校の校長は完全て申分のない紳士である、君子である)

といふ文に於て the は principal 即ち校長が我が校の校長であることを指定して居るから、that や this の如く指示する用をなし、a は一人のといふ義だから紳士の數を示し、數量の意味をあらはして居る。かくの如く考へると冠詞は形容詞の一種に違ひないのである。

練習問題

三

詞を指示し

2. This is a good book for young pupils.
3. Tom is very kind to me.
4. I think he is ill.
5. Who is that old man?
6. He is now poor and unhappy.
7. How much oil do you want?
8. It has soft, smooth fur.
9. Bring me three pens and some black ink.
10. Cut down these dead trees.

十五 動詞 — 人や物の爲す業をあらはす詞を動詞即ち verb (ヴァ-ブ) といふ。「言ふ (speak)」「歩く」(walk)「走る」(run) などは何れも人や物の行爲であつて、之をあらはす詞は皆動詞である。又状態即ち有様をあらはす動詞がある。「なり」「てある」「て居る」「となる」の如きは何れも人や物の有様をあらはすに用ふる詞であつて此の類に属する。而して此の類の動詞は大概形容詞や名詞などと並べて使はれる。例

必ずしも不幸ならず)
 He was then absent from school. (彼はその時に学校を缺席してゐた)
 Tom must be a good boy. (トムは善良な子供であるに相違ない)
 They became poor. (彼等は貧乏になつた)

といふ文に於て is, are, was, must be, became は何れも状態をあらはす動詞である。

動詞の定義—動詞は人や物の爲す業をあらはす詞及び物の状態をあらはすに用ひる詞である。

Country 練習問題
 France here
 Country
 四

下の文につき動詞を指示せ。

1. Who is that gentleman?
2. What do you want?
3. I want a pen, but not ink.
4. I don't like that kind of man.

5. Don't tell a lie; always speak
6. My father was an artist.
7. They were at play when I saw them.
8. If I were so rich, I would buy it.
9. You walk very slowly. Can't you walk faster?
10. At what time do you rise?

十六 副詞—動詞に添へて使ふ詞を副詞即ち ad'verb (アドヴァーブ) といふ。副詞は動詞を形容する事恰も形容詞が名詞を形容するが如きものである。

It is a sweet song. (心持のよい歌です)
 といふ文に於て sweet は形容詞であつて、名詞 song を形容してゐる。然るに

He sings sweetly. (あの人は面白く歌ふ)
 といへば sweetly は副詞であつて、動詞 sings を形容する。又

I will take you there some time. (何時かお前を彼處へ連れて行ってやる)
 といへば some は形容詞であつて名詞 time を形容してゐる。然るに

there sometimes. (彼は時々彼處へ行

といへば sometimes は副詞となって、動詞 goes を形容するのである。

次に副詞は形容詞及び他の副詞に附けられて之を形容する事がある。此の類の副詞は程度をあらはす。ツマリどの位であるかを示すのである。

Tom is a very good pupil. (トムは餘程よい生徒です)

といふ文に於て very 即ち「餘程」といふ詞は Tom の如何ばかりよいかといふ程度を示す爲めに形容詞 good を形容してゐるから副詞である。

又

He studies very hard. (あの人は大變に勉強して學問する)

といふ時は very は hard といふ副詞を形容する副詞であつて、又何の位勉強であるかを示してゐる。

副詞はかくの如く動詞を形容する事もあり、

形容詞又は別の副詞を形容する事もあるのであるが、それが何をあらはすかといへば、

- (一) 事物の仕様即ち爲し方。
- (二) 事の起る時或は事や物のある時。
- (三) 事の起る場所又は物のある處。
- (四) 性質・状態・位置・時の程度

をあらはす。下の例を見よ。

(一) 事物の仕方をあらはすもの

He works hard. (彼は勉強して働く)

Tom writes very well. (トムは餘程うまく字を書く)

The lamp burned brightly. (そのランプが明るくともつてゐた)

He was badly hurt. (彼はわるく怪我をした)

此の文に於て副詞 hard は works を形容して、どんな風に働くかといふ事をしてゐる。それと同様に副詞 well は Tom の字の書き方をあらはして writes を形容し、副詞 brightly は lamp のともり様をあらはし、又副詞 badly は怪我のし様をあらはしてゐる。

(二) 時をあらはすもの

He lived long ago.

He will soon come. (あの人は程なく参ります)

When did Tom come over to Japan? (トムは何時日本に來たのか)

此の文に於て long と ago は共にその人の生存してゐた時を示して動詞 lived を形容し、soon はその人の來る時を示して動詞 will come を形容し、又 when は Tom の日本に渡來した時を問ふ詞であつて動詞 did come を形容し、何れも時の副詞である。

place
(三) 場所をあらはすもの

Come here, Puck, my dog. (此處へ來い、バックよ、吾が犬よ)

It is to be found everywhere. (それは何處にても發見する事が出来る、即ち何處にでもある)

Where did you find it? (お前何處でそれを見附けたか)

此の文に於て here は Puck の來るべき場所を示して動詞 come を形容し、everywhere は動詞 found を形容して發見の場所を明にし、又 where は發見の場所を問うて動詞 did find を形容し、何れも場所の副詞である。

(四) 程度をあらはすもの

Does he work so hard? (彼はそんなに勉勵して働かぬか)

You are much taller than Tom. (君はトムより何程身長が高い)

No. 1 (number one と讀むべし) is more difficult than No. 4. (number four と讀むべし) (一番は四番より餘計にむづかしい)

此の文に於て so は勉勵の程度をあらはして副詞 hard を形容し、much はその人が Tom より何の位高いかといふ事をして形容詞 taller を形容し、more は一番の問題が四番の問題より難いか易いかの程度を示して形容詞 difficult を形容し、何れも程度の副詞である。

副詞の定義 副詞は動詞・形容詞及び他の副詞を形容する詞である。

副詞は多くは末端に ly が附いてゐる。又形容詞と同一の形をしてゐるものもあるが、多くは此の ly の有無によつて副詞がついてゐる。

形容詞の末端に ly を
例へば hard という詞は

He is a hard worker

である、即ちよく

形容詞 worker を形容さ

He works very hard

と動詞 works を形容させても、形が變らないが、形容詞 attentive は副詞に變へれば下の例の如く區別があらはれて来る。

He is very attentive. (あの人は餘程注意深い)
He listened to me attentively. (彼は注意して私の言ふ事を聞いた)

下に擧げてあるのは此の區別を示すものである。

| 形容詞 | 副詞 |
|----------------|---------------------------|
| careful (注意よき) | <u>carefully</u> (注意よく) |
| secret (秘密の) | <u>secretly</u> (秘密に) |
| slow (遅き) | <u>slowly</u> (遅く) |
| pleasant (愉快な) | <u>pleasantly</u> (愉快に) |
| (新しき) | <u>newly</u> (新しく) |
| | <u>slightly</u> (僅に) |
| | <u>skilfully</u> (たくみに) |
| | 早く) <u>pretty</u> (美しき、可) |
| | <u>nuch</u> (多くの、多く) な |
| | 詞にしても同じ形に使 |

練習問題

五

下の文につき副詞を指示し、且つその形容する詞を示せ。

1. I rose very early this morning.
2. I like it very much.
3. He is staying there.
4. He walks much faster than I.
5. The general was severely wounded.
(將軍は劇しく傷けられた、重傷を負んだ)
6. I come here twice a week.
7. That won't do. It is too heavy.
(それでは駄目だ、餘り重過ぎる)
8. He is far away from home.
9. I never thought it was so large.
(私はそれがそんなに大きいとは思ひませんでした)
10. Where do you go to-morrow?

十七 前置詞——名詞・代名詞の前に

の人或は物と他の人・物或は事との関係をあらはす詞を前置詞即ち *prep^{osition}* (プレポズィション)といふ。例へば

My lamp stands on the table. (私の燈火がテーブルの上に立ってゐる)

といふ文に於て、前置詞 on は名詞 table の前に立ち、そのテーブルと燈火が立ってゐるといふ状態とが如何なる関係をもつてゐるといふ事を明にする、即ち此の on といふ一詞で燈火がテーブルの前でもなく後でもなく下でもなく又傍でもなく、その上に立って居る事を明にする事が出来る。

Will you come by seven o'clock? (七時までに來ないか)

此の前置詞 by も君が來るといふ働きと七時といふ時との関係を示して、七時前か或は遅くとも七時に來るや否やを問ふのである。

前置詞といふ名は名詞や代名詞の前に置くから出たものである。Preposition の pre は「前」とて、position は「置く」といふ義である。

英語の前置詞の主なるものは下の通りである。

- | | | |
|----------------|----------------|----------------|
| <u>about</u> | <u>between</u> | <u>on</u> |
| <u>above</u> | <u>beyond</u> | <u>upon</u> |
| <u>across</u> | <u>but</u> | <u>out of</u> |
| <u>after</u> | <u>by</u> | <u>over</u> |
| <u>against</u> | <u>down</u> | <u>since</u> |
| <u>along</u> | <u>during</u> | <u>till</u> |
| <u>among</u> | <u>except</u> | <u>to</u> |
| <u>around</u> | <u>for</u> | <u>toward</u> |
| <u>at</u> | <u>from</u> | <u>under</u> |
| <u>before</u> | <u>in</u> | <u>up</u> |
| <u>behind</u> | <u>into</u> | <u>with</u> |
| <u>below</u> | <u>of</u> | <u>within</u> |
| <u>beside</u> | <u>off</u> | <u>without</u> |
| <u>besides</u> | | |

前置詞の定義 前置詞は名詞・代名詞の前に置いてその名詞若くは代名詞と他の詞との関係を明にする詞である。

練習問題

六

下の文につき前置詞を指示せ。

1. Will you go to Yoshino the day after to-morrow?
2. Have you read the letter on the desk?
3. It appears in to-day's paper.
(それは今日の新聞に出ています)
4. What do you want with me?
(私に何の御用がありますか)
5. He will come back to Tōkyō within a week.
6. Do you speak with him in English?
(君はあの人と英語で話をするか)
7. I generally rise a little before six.
(私は大概六時少し前に起きます)
8. Don't look into the house.
(家の中を覗き込むな)
9. I waited for him till 3 o'clock in the after-noon.

10. He is at home, but his brother is gone into the country.
11. How far is it from here to Kyōto?
12. Do you know the name of the gentleman to whom I bowed just now?
(私が只今禮をした紳士の名を御存知ですか)
13. He has been absent from school for three days.

十八 接續詞——同種類の詞と詞を繋ぎ合せ又は同種類の句と句・文と文を結び附けるに使用する詞を接續詞即ち *conjunction* (コンヂェンクシヨ) といふ。例へば

He and I are great friends. (あの人と私は親友です)

といふ文に於て、and は he と I といふ同種類の詞を繋ぎ合す用を爲すから接續詞である。

Shall you come in the morning or in the afternoon?

(君は午前に来るか 或は 午後に来るか)

といへば or といふ詞は同種の二句即ち in the morning と in the afternoon の繋ぎ合せに使つてあ

るのであって即ち接續詞である。又

He is at home. (あの人は家にゐます)

といふ文を他の文に結びつけて使ふならば下の如き文が出来る。

Go and ask if he is at home. (行ってあの人が家にゐるか聞いて来い)

He is at home, but his brother is out. (あの人は家にゐますが、然しあの人の弟は外出してゐます)

Do you think that he is at home? (君はあの人が家にゐると思ひますか)

此の三つの文に於て、第一の he is at home は if を以って他の文 go and ask に結びつけられ、第二は but を以って他の文 his brother is out に結びつけられ、第三は that を以って do you think に結びつけられてゐる、即ち此の if, but 及び that は文と文を繋ぎ合せてゐるから接續詞である。

Conjunction の con は「一緒に」又は「同一に」といふ意味であつて、junction は「繋ぐ」といふ意味である。二つ或は二つ以上の詞や句を繋ぎ合せる

から、かくの如き名稱が出来たのである。

接續詞の主なるものは下の通りである。

| | | |
|-----|---------|-------------|
| and | because | while |
| but | if | as—as |
| as | though | so—as |
| so | unless | so—that |
| or | that | either—or |
| nor | than | neither—nor |
| for | since | both—and |

此の中 as—as 以下は二詞を以って一の接續詞を爲すものと看なければならぬ。文に使ふ時には二つの詞の間に別の語句が入るのである。下の例を見よ。

Tom is not so tall as his brother. (トムは兄程に身長が高くない)

I think either Tom or his brother is at home. (トムか兄かの中どちらか一人家に居ると思ひます)

Both Tom and his brother are at home. (トムも兄も共に家に居る)

接續詞の定義—接續詞は同種類の詞と詞・句と句又は文と文を連結するに用ふる詞である。

練習問題

七

下の文につき接續詞を指示せ。

1. I will go if it is fine weather.
2. Go by jinrikisha, and you will catch the train.
(人力車で行け、そうすれば汽車の間に合ふ)
3. I like neither wine nor tobacco.
(私は酒も煙草も好きません)
4. I am sure that he will succeed.
(私はあの人が旨くやるだらうと信じます)
5. That I won't do unless my father permits me.
(それは父が許さなければ致しません)
6. That I won't do, for my father does not permit me.
(それは致しません、父が許しませんから)
7. I did not go as it was very cold.

8. Though he is so poor, he works very hard; so I think he will succeed in time.

(あの人はあんなに貧窮であるけれども、非常に勉強して働くから、私はあの人がやがて成功すると思ひます)

9. Tom works very hard, while his brother is an idler.

(トムは非常に勉強するがあれの兄は惰者である)

10. Mother told John that he was wrong.

(母はジョンにお前が悪いといった)

十九 間投詞—吾々人間が喜怒哀樂その他急激に起る感情の爲めに覺えず知らず口に發する音を文字に寫して「ア」「ホイ」「ヤレ」「オヤオヤ」といふが如き詞を間投詞即ち *in'jection* (インタージェクシオン) といふ。英語では ah! oh! alas! (噫) の如き詞が即ちそれである。

間投詞の定義—間投詞は感情の激したあまりに人の口から漏れる音聲を寫した

Interjection の inter は「間」といふ義、jection は「投げ込む」といふ義である。故に日本語で之を直譯して間投詞といふのである。間投詞は文と文との間に挿んで使ふ詞であるから、かくの如き名をつけたのである。

練習問題

五八

下の文につき間投詞を指示せ。

1. Ah! that is a mistake.
2. Hurrah! no more school this morning!
(ヤア、今朝はもうこれで學校が休みだ)
3. Oh, how cruel you are! Let him go.
(アア、君は何といふ残酷な人だ、にがしてやり給へ)
4. That is a very good joke. Ha! ha!
5. Hush! there comes the teacher.
(シッ、先生が今いらっしゃるぞ)
6. Hailoo, Yoshioka! Please wait for me.
(オイ、吉岡、どうか待って呉れ)

16年
1月17日 Yoshikawa

二十八品詞の分類 (Parsing) — 以上述べ來った八種の詞を英語で *the parts of speech* といふ。英語には今日幾万の詞があるか分らない程に多いけれども、其の種類を分てば皆な此の八種の中のどれかに入るのである。而して一詞一詞につき是れは名詞是れは動詞と、一々その種類即ち *part of speech* をいふことを *parsing* (パアシング) といふ、即ち八品詞分類といふことである。今下の文につき *parsing* をするならば、

Tom is a very good boy.

| | | | | | |
|-----|-------|-----|------|-------|-----|
| Tom | | 名詞 | Very | | 副詞 |
| is | | 動詞 | Good | | 形容詞 |
| a | | 形容詞 | Boy | | 名詞 |

此くの如くするのである。

此の *parsing* をするに當って一つ注意すべきことは、同一の詞が使ひ様によって、或は名詞となり、或は動詞となり、或は前置詞となり、或は副詞となるなど、色々種類が變り、隨つて見そこなひをするとい

They walk briskly. (の人 早く歩く)

の walk (歩く) は動詞に違ひないが、

They took a **walk** together. (彼等と一緒に散歩をした)

といふ時の walk (散歩) は名詞である。

In the **early** years of Meiji English were taught **in** a few schools. (明治の初年には英語が少数の學校で教へられたのだ)

の early は名詞 years を形容して居るから確かに形容詞であるし、又 in は前にも言った通り前置詞であつて、名詞 schools の前に置かれ、それと前にある were taught との關係を明かにして居るのであるが、

He is not **in**; he **left** for Osaka **early** in the morning. (あの人は居ない、あの人は朝早く大阪へ向け立って行った)

といふ時は early は left といふ動詞を形容して副詞となり、又 in は在宅といふ意味であつて名詞・代名詞の前に置いてあるのでないから、前置詞ではなく、場所を示す副詞となる。今一つ下の例を比較して見よ。

He is at home, **but** his family are all out. (あの人は在宅だが併し一族は皆な外出して居る)

None **but** three was saved. (三人の外皆な助からなかつた)

There are **but** three left. (残されたる唯だ三つがある、即ち唯だ三つより外に残って居ない)

此の三文に於て第一の but は「併しながら」の義であつて接續詞、第二の but は「の外」といふ義で three の前に置かれた前置詞、第三の but は「唯だ」といふ義で副詞である。That の如きも使ひ方の如何によつて、代名詞にも、形容詞にも、接續詞にもなる。

これが即ち八品詞の分類に非常に注意が在る譯である。併し八品詞の分類は餘程大切なものであつて十分練習を積んで置かなければ、初學者は後に至つて大なる不利益と困難に出逢ふことになるのである。下に随分多數の分類問題を出して置くから、よく考をこらして研鑽して貰ひたい。

練習問題

九

下の文につき各詞を分類せよ、但しイタリックにて印刷した詞を除く。

1. Wrose early this morning.
2. Do you know that Mr. Johnson has arrived?
3. I have shut the windows.
4. You are much taller than Satō.
5. They like them very much.
6. How much paper do you want?
7. The merchant left before daybreak (夜明前に).
8. That gentleman is the new teacher of English.
(あの方は今度新たにいらっしゃった英語の先生です)
9. The peony (牡丹) is the most beautiful of all flowers.
10. Let us set out if the carriage is ready.
(馬車の支度が出来て居るならば出かけよ)

5)

11. They came while I was out.
12. It is three miles from here to the school.
13. Ten officers and men were taken prisoners.
(將校と兵卒が十人捕虜にとられた)
14. Both Tom and Jim speak German.
15. Where did you put my umbrella after you used it?
(君は僕の傘を使った後に何處に置いたか)
16. We had composition, but (did) not (have) gymnastic exercise.
(吾々は作文はありましたが併し體操はありませんでした)
17. My sister was unwell, so I came without her.
(妹は不快でありましたから私は妹を連れずに来ました)
18. Do you think I am a beggar?
19. Who is that old lady?
20. Ah! we were young when we saw each other for the first time.
(君と僕と初めて互ひに出逢った時は若う御座いました)

21. I think he will succeed, for he works very hard.
22. The carpenter builds houses.
23. We see with our eyes, and hear with our ears.
24. I want to see him this afternoon (今日午後に).
25. Taikō was a great man who lived about three hundred years ago.
26. Please show me some picture-cards (繪葉書).
27. Where will you go to-morrow?
28. Fresh water is a pleasant drink.
29. There are five continents on the globe.
30. How many continents are there in the world?
31. Wellington was a great English general who defeated Napoleon at Waterloo.
32. Is it raining or snowing?
33. What do you see in that tree?
34. I am glad that you are always so kind to these children.
35. Don't leave your books on the veranda.
(椽側に本をうち捨て置くな)
36. Once there lived a man whose name was Zannen Kinosuke.

- (昔残念氣之助といふ名の方が居ました)
37. Have you any money with you?
(あなた此處に少しでも金銭を持合せて居ますか)
38. Neither he nor his son was aware of it.
(それに心づいて居なかった)
39. He may fail once or twice.
(一度や二度は失敗するかも知れない)
40. This temple was built in the reign of the Emperor Shōmu.
(此寺は聖武天皇の御代に建立せられた)
41. What have you been doing since the morning?
42. Learn while you are young.
43. Will you come after school is over?
(學校が済んでから來ないか)
44. The cuckoo builds no nest for herself.
(郭公は自力で巢を造らない)
45. Do you know when (いつ) he arrived?
46. This is the picture my aunt
New-year's gift.

(これは伯母が年玉に呉れた紙です)

47. Don't touch this paper *while* it is wet.

48. What is his telephone number?

(あの人の電話番号は何番ですか)

49. That auto ran over a child of *about* four years.

(あの自動車は四歳ばかりの小供を轢いた)

50. Halloo, boys! are you going to the seashore?

(オイ、諸君、海岸へ行くのか)

第三講

文の構造及び種類

文—主辭—叙述辭—動詞—形容辭—目的辭—補辭—單文—複文—雜文—宣明文—疑問文—命令文—感歎文

二十一 文—詞即ち單語が聚って何か一つまとまった考へ・想像・事實をあらはすものを文即ち *sen'tence* (センテンス)といふことは既に前に述べた通りである。文の簡単なのは一つの單語で出来る。例へば *Come.* といへば「來れ」といふ考へをあらはして一の命令の文になる。又 *Attention!* といへば「氣をつけ」といふ意味でこれ又簡単ながら一の完全な考へをあらはして一の文をなしてゐる。然し前に挙げた *Come.* といふは本來 *You come.* 即ち「汝來れ」を略したものの、又 *Attention!* は *You have attention!* を略した文であるから、此の二文ともに各々二つ以上の單

語から成立つてゐるのである。之を要するに文は大抵二つ若くば二つ以上の單語が聚つて出來得べきものである。

次に文は何かまとまつた一の意義がなければならぬ。意味のない或は意味のわからぬ文字の聚合は文にはならない。例へば

The animal grows and dies. (動物といふものは生立つて後に死ぬ)

といへば簡單ながら一の意味が明かにあらはれて完全なる文をなすけれども、若し之を變更して grows the animal とし又は之を轉倒して grows the animal and dies としたら、無意味か意味の明かならざる文字の聚合となつて眞の文をなさない。故に文は一の意味をあらはすべき詞を文法の規則と習慣の定め通りに列べて、一のまとまつた思想・事實などをあらはすものである。

文の定義—文即ち *sentence* は一の思想をあらはす詞の聚合である。

二十二 主辭—單語を聚めて一の意義をあ

らはし *sentence* を作るに必ず無くてはならぬものがある。それは主辭と叙述辭の二つである。吾々が何か語り或は書く以上はその話の種となるべきものがある、そのものについて事實なり感想なりを述べるのである。その話の種となるものの名は即ち主辭である。例へば「花が咲いてゐる」「月が出た」といへば、此の話の種は「花」と「月」であつて、「花」といふ名詞と「月」といふ名詞がその主辭をなすのである。之を英語に書きあらはせば

The flowers are out. (花が咲いてゐる)

The moon has risen. (月が出た)

となる。即ち the flowers と the moon が此の二文の主辭となつてゐる。主辭は日本語では略せられることが屢々ある。例へば「花が咲いたか」「ハイ咲いて居ます」といふが如き場合に、問の方には「花が」といふ主辭があるけれども答の方にはない。然し勿論之は全くないのではなく、便宜上之を略したといふまでである。英語ではかゝる場合にも主辭を略せずして、名詞の代

りに代名詞を使ふ。即ち「ハイ、咲いてゐます」といふ所を

Yes, **they** are out.

といて Yes, are out. とはいはない。然し英語でも全く主辭を略してよい場合がないではない。命令や依頼をあらはす文では之を省くのが常である。前に擧げた Come. や Attention! の場合の如きは主辭たる you が略せられてゐるのである。

Please bring me a tea-cup. (何うぞ茶碗を一つ持って来て下さい)

Don't make such a noise. (そんなやかましい音をさせるな)

といつても又主辭の you が略せられて居るのである。かくの如く文法や慣習の定めによつて略し得べき場合は別として、主辭といふものは文になくはならぬ。若し主辭がない時は何の話をして居るのかわからぬことになるから、随つて文とはならない譯である。

I am sleepy. (私はねむい)

Are **you** sleepy? (君はねむいか)

He looks sleepy. (あの人はねむそうな顔をしてゐる)

The servant looks sleepy. (下女がねむそうな顔をしてゐる)

此の四つの文に於ては I, you, he, the servant は何れも主辭である。日本文では主辭には多く「は」の字か「が」の字をつけていふ。「花が咲いた」「月が出たか」の類である。故に英文に於てどの詞が主辭であるかを知るにはそれを譯して見るが最もよい。日本語に譯して「は」か「ががつく」詞ならば大概主辭である。

Is **the moon** up? (月が出てゐるか)

Is **the weather** fine? (天氣はよいか)

かくの如く譯して見れば此の文の主辭は the moon と the weather であることが明かになる。又主辭は普通の文ならば頭に立ち、問の文ならば動詞の次か或は動詞と動詞の間に現はれる規則であるから、之を知るのは左までむづか

……

あるから、主辭が動詞 is の次に出てゐる。又

Do **you** like grapes? (君は葡萄を好むか)

Will **you** go with me? (君は僕と一緒に
行かないか)

此の文は矢張り問の文であるから、動詞 do like
の中間と will go の中間に主辭の you が現はれて
ゐる。主辭を探すには以上二種の方法を以つて
するが最も便利である。

主辭は又主部ともいふ。英語では之を *subject*
(サブヂェクト)といふ。

主辭の定義—主辭とは文の主題と
なる事物の名或はその代名詞をい
ふ。

主辭は

He is a good boy.

Birds fly

の he 及び birds の如く一詞で出来るものと、

The moon is up.

The name of that boy is Tom. (あの子供の名

はトムである)

の the moon 及び the name of that boy の如く二詞或
は二詞以上より成る事がある。かくの如き場
合に主要なる詞を主語即ち *subject word* (サブヂェ
クトワード)といふ。上の例では moon と name
が主要な詞であるから、即ち *subject word* である。

主語に使ふ詞は前の例にも見える通り通常名詞か代
名詞である。然し形容詞・頭に to のついた動詞(之を *infin'*
itive インフイニティヴといふ)或は末端に ing のついた動詞
(之を *gerund* チェランドといふ)を主語に使ふこともある。

Two of them are white. (その中二つは白い)

Can **any** of you tell the name of this plant? (お前達の中誰か
此の植木の名をいへるものがあるか)

To see is to believe. (見るは信ずるなり)(見ればなる
程と信ずることが出来るが、見ない内は十分に信ぜ
られないといふ意味)

Seeing is believing. (見るは信ずるなり)

此の文の第一には形容詞 two, 第二には形容詞 any, 第三に
は to のついた動詞、第四には ing のついた動詞が主語に
使はれてゐる。

練習問題

+

下の文につき主辭を指示せよ。又主辭が二
詞以上なる

Tomick

1. The sun shines in the sky.
2. Bees fly from flower to flower.
3. Do you know his name?
4. Yesterday I went to school with Tom.
5. Does he speak English?
6. It is five o'clock.
7. What time is it?
8. His father is staying (逗留中です) at Sendai.
9. One of them is absent.
10. What do you want?

二十三 叙述辞——吾々が言ひ或は書くには先づ話の主題となる物を定めて、それにつき何かを述べる。此の主題となるものゝ名は主辭であるが、その主辭について述べる言葉は之を叙述辞といふ。「花咲き、鳥歌ふ」といへば主辭は「花」と「鳥」とであつて、その「花」と「鳥」とについていふ言葉即ち「咲き」「歌ふ」は叙述辞である。之を英語で書けば

The flowers are out, and the birds are singing.
 となる。而して the flowers と the birds は主辭であ

つて、are out と are singing が叙述辞である。

叙述辞は主辭と同様に文に缺くべからざるものである。之がなくては眞の文にはならぬ。叙述辞の主要の部分は動詞である。

The flowers are out.

He will come in the afternoon.

What do you want?

此の第一の文に於ては叙述辞は are out であつて、その主要部は動詞 are である。第二の文に於ても叙述辞は will come in the afternoon であつて、その主要部は動詞 will come である。又第三でも叙述辞は what do want であつて、動詞 do want がその主要部である。^(ツマ)動詞は文に缺くべからざる詞である。稀には動詞を略しても意味の通ずる文があるけれども、それとても動詞がないのではなく、唯だ略せられたまでである。

叙述辞は英語で predicate (プレディケート) といひ、その主要部即ち動詞を predicate verb (プレディケイブ) といふ。

叙述辞の定義——叙述辞とは主辭に

つき述べる言葉をいふ。

練習問題

+-

下の文につき叙述辭及其の動詞を指示せよ。

1. London is the capital of England.
2. Birds fly in the air. 飛ぶ
3. Did you see the air-ship (空中船)?
4. I like pears very much.
5. He can write his own name.
6. In the North the snow lies deep all the year round.
(北地では雪が年中深く積ってゐる)
7. Can you row?
(君は舟が漕げるか)
8. They will arrive to-morrow.
9. Does this watch keep exact time?
(此の懐中時計は時間が正しく合ふか)
10. Give me that large book.

二十四 形容辭と句——前に述べた如く文には主辭と叙述辭の二部分が必ず具はって居て、いづれを缺くことも出来ないのであるが、さて其の主辭と叙述辭とは各一詞づゝてよいかといふに、極簡単な文たとへば

Man speaks. (人はものを言ふ)

She wept. (あの人は泣いた)

の如きものならば其れて足る譯であるが、多くの文は此くの如く簡単なものでは濟まないから、主辭にも叙述辭にも自然に他の詞を付けねばならぬこととなる。即ち

That man speaks English. (あの男は英語をつかふ)

She then wept bitterly. (あの人はその時にサンザン泣いた)

の如くなる。かゝる場合に主辭の中の主語は man と she, 叙述辭の主語は動詞 speaks と wept であつて、他の詞は皆な附屬辭である。上の場合の that は man の附屬辭、then と bitterly は wept の附屬辭である。

さて主辭の方の附屬辭は何であるかと云ふに、主語が名詞か代名詞であれば、詞 (*word*) 即ち單語、句即ち *phrase* (フレーズ)、及び *clause* (クローズ) の三種である。

主辭に附屬する詞即ち單語は重もに形容詞、名詞、代名詞である。

That old man speaks English. (あの老人は英語を使ふ)

これは主語 *man* に *that* と *old* といふ二形容詞が附屬して居るのである。

Satō's straw hat is stained with ink. (佐藤の麥稈帽は墨で汚れて居る)

これは主語 *hat* に *Satō's* と *straw* (麥稈) といふ二名詞が附屬して居るのである。

His straw hat is stained with ink.

Is your father out? (君の御親父様は御留守ですか)

これは主語 *hat* と *father* に *his* と *your* といふ代名詞が附屬して居るのである。

主辭には又句が附屬して居ることがある。

例へば

The city of Tokyo is the capital of Japan. (東京市は日本の國都である)

The letter on that table is for you. (あの卓子の上の手紙は君の處へ來たのだ)

Houses built of bricks are now very common. (煉瓦で築いた家は今では極普通です、珍しくはありません)

の *of Tōkyō*, *on that table*, *built of bricks* の如きは何れも句であつて主辭に附屬して居る。

また別種類の句で主辭に附屬するのがある。此の句は文即ち *sentence* の如く主辭と叙述辭を具へて居て而かも獨立の文を爲さず、主辭に從屬するのである。

The book I bought yesterday is for him. (昨日私が買った本はあの人にやるのだ)

The one you gave me is much better than this. (あなたが下さつたのは此より餘程宜い)

The tree which you planted last year root. (君が植へた樹は)

A child whose parents are dead is called an orphan. (その両親が亡くなった小供は孤兒と云ひます)

此の四文の中第一に於て I bought yesterday は主辭 I 叙述辭 bought yesterday を具へて居るが、獨立の文を爲さずして別の主辭 the book に附屬し、第二に於て you gave me も同く主辭 the one に附屬し、第三に於て which you planted last year も同く主辭 the tree に附屬し、第四に於て whose parents are dead また同く主辭 a child に附屬して居る。

主辭に附屬する句は此くの如く二種類に分れ、主辭と叙述辭を具へるものと具へないものとある。此の主辭と叙述辭を具へざる句を *phrase* (フレーズ) といひ、之を具へた句を *clause* (クローズ) といふ。Of Tōkyō, on that table, built of bricks は *phrase* であつて、I bought yesterday, you gave me, which you planted, whose parents are dead の如きは *clause* である。

以上の説明によつて主辭は詞と *phrase* と *clause* とのことのあるものであるといふことが明

白になつたが、此の三種の附屬辭が主辭或は他の名詞・代名詞に従ふ時に之を「形容する」といふ。

The letter on the table.

The book I bought yesterday.

の the と on the table と I bought yesterday は letter と book を各形容して居るのである。之を英語では *modify* (モディファイ) すると稱する。随つて前例の the の如き、on the table の如き I bought yesterday の如き附屬辭を形容辭即ち *modifier* (モディファイヤ) といひ、又 *adjunct* (アヂャンクト) ともいふ。

練習問題

十二

下の文につき主辭に附屬する詞、*phrases*, *clauses* を指示し、且つ其の形容する主語をも示せ。

1. His father is an Englishman, but his mother

t.?

3. The building on the opposite side is a school-house.

(その向ふ側の建物は校舎です)

4. A man who builds houses is a carpenter.

5. The high mountain to the right is Komagadake.

(右の方の高山は駒ヶ嶽です)

6. Kondō's dictionary is quite new.

7. The house in which he used to live stands to this day.

(その住み慣れた家は今日まで立って居る)

8. The one in that drawer is yours.

(その抽出の中のは君のだ)

9. This gold watch was brought over from America.

10. The wife of my brother is ill.

二十五 動詞の形容辭——主辭が形容辭を持つ如く叙述辭の主部なる動詞も形容辭を持つことは前に述べた。

She then wept bitterly. (あの人はサッサン泣いた)

といふ例に見える通りである。即ち then wept bitterly が此の文の叙述辭であつて、その主部は動詞 wept であり、then と bitterly は動詞を形容する辭である。前にも述べたる如く動詞を形容するものは重に副詞であるから、随つて叙述部の形容辭は十中八九まで副詞である。

Where were you yesterday? (君は昨日何處へ行つたか)

Tom works very hard.

Why did you rise so early? (何故君はこんなに夙く起きたのか)

此の三つの文の動詞 were, works, did rise を形容する形容辭は where, yesterday, hard, why, early であるが、これ亦副詞である。

副詞の外に句も亦動詞を形容する。此の句も主辭の場合に於けるが如く二種類あつて、一は主辭及び叙述辭を具へず、一は之を具へてゐる。之を具へないのは phrase. 具へてゐる clause である。

A boy came with a letter from M

の男の子がスミスさんの手紙を持って来た)

I got to the station **in time** for the second train.
(二番汽車に間に合ふやうに停車場に到着した)

Did you put it back **in the drawer**? (お前あれを抽出の中へ戻して置いたか)

By whom was this book written? (此の本は誰に書かれたのですか)

これ等は皆動詞が *phrase* に形容せられた例である。即ち第一の例では *with a letter* といふ *phrase* が動詞 *came* を形容し、第二の例では *in time* といふ *phrase* が動詞 *got* を形容し、又第三の例では *in the drawer* が動詞 *did put* を形容し、第四の例では *by whom* が動詞 *was written* を形容してゐるのである。次に *clause* が動詞を形容する例を挙げるならば

Try again **if you can**. (君若し出来るならい
ち一度やってみて)

learned English **while I was at Kōbe**. (私は神戸に英語を習った)

Tom is honest, **though he is very poor**. (トムは極めて貧乏だけれども正直である)

As he was ill, I came without him. (あれは病氣であつたから連れないうで参りました)

此の四文の中、第一の *clause*, *if you can* は動詞 *try* を形容し、第二の *clause*, *while was at Kobe* は動詞 *learned* を、第三の *clause*, *though he is poor* は叙述辭 *is honest* を、第四の *clause*, *as he was ill* は動詞 *came* を形容してゐる。

練習問題

十三

下の文につき叙述辭を形容する副詞・*phrases*, *clauses* を指示し、且つその形容する動詞を示せ。

1. Where do you live?
2. I have lived here from a boy.
3. Did you begin English while you were in a common school?

(お前は小學校にゐる頃に英語を始めたのか)

4. He will come back in a few days.
5. Bring your brother with you if you find him at home.
(君の弟が家にゐたら一緒に連れて來給へ)
6. It was past nine when he rose.
7. Is there a post-box near your house?
8. Are you going down to Kamakura to-morrow?
9. I don't like penmanship very much, and write very clumsily.
(私は餘り書を好みません、だから書くことが極く下手です)
10. He went to bed soon after finishing his dinner.
(晩飯を済した後間もなく寝た)

二十六 目的辭——動詞は人や物が爲す行爲をあらはす詞であるが、さて此の行爲を區別すると二種類あって、その働きが他の物に及ぶものと及ばないものがある。例へば「書く」「建てる」「破る」「殺す」などいふ行爲はその働きを受けるものがなくては行はれないものである。即ち「書く」といへば書かれる文字か手紙かがなけ

ればならず「建てる」といへばまたその働きを受けるもの即ち家・寺・倉の如きものがなければならぬ。然るに「輝く」「落る」「走る」「凍る」などいふ働きは性質が違ってゐて、それを受けるものがなくても出来るのである。即ち日月は輝く時にその働きを受けるものがなくとも輝くに差支へがない。故に吾々は

The sun shines bright. (日が朗に輝く)

といふのみで一の意味をあらはすことが出来る。之に反して

He wrote. (彼が書いた)

といふのみでは「書く」といふ働きを受けるものがないから、随って無意味になる。かゝる場合は動詞の次に何か働きを受けるものゝ名を加ふれば兎にも角にも意味の有るものになるのである。例へば

He wrote a book. (本を書いた)

He wrote a letter to his father. (父の處

を書いた)

の如くするのである。Fell (倒れ

倒した), return (歸る) と return (返す) の如きも、同様の區別が生ずる。下の例を見よ。

The dead tree *fell*. (枯木が倒れた)

A woodman *felled* the tree. (一人の柚人が木をきり倒した)

He will *return* in a week. (一週間たてば歸つて來ます)

I will *return* him the book in a week. (一週間たてばかの本をあの人に返します)

さて此の「書く」「きり倒す」「返す」等の如く働きを受ける物の有るべき行爲を文法上では他働といひ、「輝く」「倒れる」「歸る」等の如く、なくとも行はれる働きを自働といふ。而して他働をあらはす動詞の下に名詞・代名詞などを置いてその働きを受けることを示す場合に、その名詞・代名詞などを目的辭といふ。上の例で *wrote* の目的辭は a book, a letter; *felled* の目的辭は the tree; *will*

目的辭は the book である。目的辭を英(オブヂェクト)といふ。

す動詞は文法上では他動詞とい

ひ、自働をあらはす動詞を自動詞といふ。つまり目的辭のいるのは他動詞、目的辭のいないのは自動詞なのである。他動詞を英語では *transitive verb* (トランズィトィヴ ヴァ-ブ) といひ、自動詞を *intransitive verb* (イントランズィトィヴ ヴァ-ブ) といふ。

目的辭は多く名詞か代名詞である。目的辭も主辭の如く主部と形容辭で成立つことがある。その形容辭も亦主辭の場合の如く詞或は句である。

He wrote a large book. (彼は一冊の大きな本を書いた)

此の文では形容詞 a と large が目的辭 book を形容してゐるのである。

Give me the book on the shelf. (棚の上の本を下さい)

之は目的辭 book を the といふ形容詞及び on the shelf といふ phrase で形容したのである。又

Show me the book that lies under your table. (君の机の下にねてゐる本を見せて下さ)

といへば目的辭 book は the といふ形容詞と that lies under your table といふ clause に形容せられてゐるのである。

練習問題

十四

次の文につき各動詞の自働なるや他働なるやを示し、他動詞につきては目的語を指示し、且つ目的語に附屬する形容辭の詞なるや phrase なるや將た clause なるやを示せ。

1. Show me the map you bought the other day.
(此の間お買ひになつた地圖を見せて下さい)
2. See the bird on the tree.
3. I never saw his father.
4. Put that straw hat on the peg.
5. Did you ever see a house built of stone?
6. Have you tried the tea which came from Shizuoka?

(静岡から來た茶を試みましたか)

7. Have you finished your composition?
8. I will take the book with a green cover.
(綠色の表紙の本を買つて置かう)
9. Yesterday I saw Mr. Green from New York.
(昨日私はニューヨークから來たグリーンさんに會ひました)
10. I got seven large red apples from that tree.

have

二十七 補辭——動詞の中には前に述べた目的辭や形容辭などを要しなくても、別に或る詞がなくては全く意味を爲さないものがある。例へば is, has, become の如き詞である。

He is. She is. He has become.

の如きは「あの人は——である」「あの女は——だ」「あの人は——になつた」といふのみであるから、譯の分らぬ言葉であつて文を爲すものとは見られない。そこで此くの如き動詞には何か詞句を加へて其の働きを補ふことが必要となる。即ち

He is an honest boy. ^彼~~彼は~~正直な小供だ)

She is **tender-hearted and modest**. (あの女は氣心が柔しくておとなしい)

He has become **very poor**. (あの人は極貧乏になった)

He has become an **apprentice**. (あれは小僧になった)

の如くするのである。かくすれば兎にも角にも意味のあるものとなって文の體を具へる。而して斯くの如く他の詞句の補助を受けて完全な働きをなす動詞を不完全動詞即ち *incomplete verb* (インコンプリート ヴァーブ) といひ、他の詞句の助を受けなくても意味の現はれる動詞、たとへば

That child **can walk**. (あの小供は歩ける)

The sick man **died**. (その病人は死んだ)

の *can walk* と *died* の如きを完全動詞即ち *complete verb* (コンプリート ヴァーブ) といひ、又不完全動詞の働きを助ける詞や句を補辭即ち *complement* (コンプレメント) と稱へる。上に挙げた文例に於ける *an honest boy*; *tender-hearted and modest*; *very*

不完全動詞と補辭
及び補辭

poor の如きは即ち此の補辭である。

補辭の主部は通常名詞か代名詞であるが、之にも主辭や目的辭と同様に形容辭が附屬すること勿論である。

He is an **honest boy**.

といふ文に於て名詞 *boy* は補辭の主部であるが、*an* と *honest* といふ二つの形容詞は此の名詞の形容辭に用ひられて居るのである。

He has become **very poor**.

に於ても形容詞 *poor* は補辭であつて、之に副詞 *very* が形容辭として附屬する。又

He is a **man of parts**. (あれは器量人だ)

This is **the book he gave me**. (これはあの人が呉れた本だ)

の如きは、補辭 *man* 及び *book* に *a* 及び *the* といふ詞が附屬して居るのみならず、別に *of parts* といふ *phrase* と、*he gave me* といふ *clause* が從屬して居る。即ち補辭も亦た主辭や目的辭の如く詞や句を形容辭として伴ふことが出来るのである。

不完全動詞の重なるものを挙げると、*am*,

is, are, was, were, be, been, appear, look, seem, smell (香がする), sound (聞える), feel (感ずる、心持がする), become, turn (なる), grow (なる) 等である。

練習問題

十五

下の文に就き動詞の完全・不完全を分ち、且つ不完全動詞の補辭と其の形容辭とを指示せ。

1. He has grown old.

2. That child already speaks.

(あの児はもう物ごとく)

3. I am very glad of it.

4. She felt sad and wept bitterly.

(あの人は悲しく感じて、サンザン泣いた)

5. It may seem very strange to you.

(それはあなたには餘程變に見えるかも知れません)

6. The dog can bark, and the horse can neigh.

7. I want a pair of shoes.

8. It was quite dark when I came home.

9. The rose smells very sweet.

10. You look pale. Do you feel chilly?

(君は蒼い顔をしてゐるが、さむ氣がするか)

二十八 文の種類——前にも述べた如く文には主辭と叙述辭といふものがなくてはならぬのであるが。文の中で一つの主辭と一つの叙述辭を含むばかりのものを單文といふ。英語では之を *simple sentence* (シンプル センテンス) といふ。下に擧げるのは皆單文である。

Tom works hard.

He is an honest boy.

He is a hard-working honest boy. (よく働く正直な兒である)

My friend Tom is the best pupil in our class. (私の友達のトムは吾が級で一番良い生徒だ)

ツマリ文は幾ら長くても、主辭が一つ動詞も一つなれば單文である。上の四例の中、第四は十詞から出来ては居るけれども、主辭が一つ (my friend Tom が主辭である) しかなく動詞も一つ (is

が動詞である)しかないから、矢張り單文である。

單文が二つか或は三つも四つも聚って一つの文を爲す時は複文或は雜文と成る。例へば

Tom is honest.

He works hard.

は共に單文であるが、此の二つを合せて

Tom is honest and works hard.

といへば複文となり、又

Tom is an honest boy who works very hard. (ト

ムはよく働く正直な兒だ)

といへば雜文となる。

然らば複文と雜文との差異は如何といふに、これは少年讀者諸子にはわかり兼ねるかも知れぬけれども、一應此處に簡単に説明をして置かう。なほ詳しいことは接續詞の分類の部に至って述べる心である。

單文を二つ或は二つ以上繼ぎ合せて複文・雜文を作るには、何か之を繋ぐ詞がなくてはならぬ。上の例に見えた and の如きは其の一例である。之を文法上接合辭即ち *connective* (コンネ

クトイヴ)といふ。接合詞は四種類あつて、第一が代名詞、第二が形容詞、第三が副詞、第四が接續詞である。而して此の接續詞にも種類が二つあつて、一を同位接續詞といひ、他を從位接續詞といふ。同位接續詞の主なるものは and, but, so, yet, therefore (是の故に)であつて、if, though, although, as, for, because, since, (故に), that, so that, lest の如きは從位接續詞に屬する。さて話が元の文に返つて、單文と單文とを繋ぎ合せる接合辭が同位接續詞例へば and, but の如きものなれば、その文は複文となり、又從位接續詞か或は代名詞・形容詞・副詞などであれば雜文となるのである。

I was unwell and remained at home all day. (私は不快であつた、だから終日家にゐた)

My brother went, but I remained at home. (兄は行きました、然し私は家にゐました)

此の二文は何れも同位接續詞で繋ぎ合せてゐるから複文である。此の同位接續詞 and, but の代りに as, though を使ふことにすれば、二文共一變して雜文となる。

高無

— 76 —

As I was unwell, I remained at home all day. (私は不快でしたから、終日家にゐました)

I remained at home, though my brother went. (兄は行きましたけれども、私は家にゐました)
この二文は即ち雑文である。接續辭 as, though が従位接續詞だからである。又

1. This is the book that he gave me the other day. (之は先日あの人が呉れた本です)

2. Taikō was a great man who lived about three hundred years ago. (太閤は三百年以前の英雄でありました)

3. I don't know which it is. (私はそれがどちらだか知らない)

4. Nobody knows who made it. (誰がそれをこしらへたか何人も知らない)

5. Tell me what book you want. (何んな本を欲しいかいひ給へ)

6. Do you know when he will come back? (君はあの人が何時歸るか知って居るか)

7. He did not tell me why he left school. (彼は)

— 77 —

何故退學するかといふことを僕にいはなかつた)

8. I began English while I was at Kōbe. (私は神戸にゐる頃に英語を始めた)

9. I have not seen him since I parted with him last year. (私は去年あの人に別れてから會ひません)

10. He will not come if he is unwell. (不快ならば來ません)

11. I know that he is not coming. (私は彼が來ないと思ふ)

以上十一の文の中、第一第二第三第四は代名詞を以て繋ぎ合され、第五は形容詞を以て繋ぎ合され、第六第七第八第九は副詞を以て繋ぎ合され、第十第十一は従位接續詞を以て繋ぎ合されてゐる。随つて皆雑文であるといふことが出来る。

前に clause の説明をする時に述べたことであるが、句といふものゝ中で主辭と叙述辭を具へたものは之を clause といひ、主辭も叙述辭もな

いものは之を *phrase* といふ。故に單文は一の *clause* より成る文だといふことが出来、又複文及び雜文は二若くは二以上の *clause* より成るといふことが出来る。而して上に挙げた十一の文例に於ける如く代名詞・形容詞・副詞若くは從位接續詞を頭に持つてゐる *clause* は、之を持つてゐない *clause* に附屬してゐるのであるから之を從位 *clause* といひ、從位 *clause* を從屬せしめてゐる *clause* を主位 *clause* といふ。此の主位 *clause* と從位 *clause* を持つてゐるのは雜文に限る。

As he was ill, I came without him. (彼は病氣であつたから、連れて來なかつた)

I found that he was ill. (私は彼が病氣であることを發見した)

此の二文の中、第一の *as he was ill* と第二の *that he was ill* は共に頭に從位接續詞 (*as, that*) を持つてゐるから從位の *clause* であり、又 *I came without him* と *I found* は從位 *clause* に從屬せられてゐるから主位 *clause* である。随つて上の二文は共に雜文である。

複文
雜文。

複文の中の *clauses* は雜文の中の *clauses* の如く主從の區別がなく、何れが重く何れが軽いともいへない。即ち複文は同等の *clauses* が聚つて出来るものである。例へば

As he was ill, I came without him.

といふ雜文に於ては「彼が病氣であつた」といふ事は自分が彼といふ人を伴はずして來たといふ行爲の理由の説明として附加へたまでの句であつて、此の文の主眼として述べたものではない。然しながら「私が彼を連れずして來た」といふことは此の文の眼目とすることである。かくの如く雜文にあつては一の *clause* の趣意が他の *clause* の趣意よりも重くなつて主從の如き關係が出来る。然るに複文の方では

He was ill, and I came without him.

の如く同じ重みの句を二つ並べたものであるから、主位・從位の區別をつけることが出来ない。そこで複文を成すところの *clauses* を同位 *clauses* といふのである。同等の位置に立つ *clauses* といふことである。

phrase は *clause* と違って主辭もなく叙述辭もないものであるから、單文の中に幾つあっても又如何に長くてもその單文が複文・雜文に變ることはない。故に *clause* を *phrase* か或は詞に改めることが出来る限りは、複文や雜文を單文に變へることが出来る。言を換へていへば同じ事を或る場合には單文にも複文にも亦雜文にも書きあらはすことが出来るのである。例へば「大將が殺されて全軍が潰走した」といふことを複文でいへば同位接續詞 *and* を使って

The general was killed, *and* the whole army gave way.

といふのであるが、之を雜文に改むれば

When the general was killed, the whole army gave way.

となり、又之を單文にすれば *when* the general was killed を *phrase* に變じて

The general being killed, the whole army gave way.

とすることも出来る。なほ下の文につき比較

せよ。

複文—He was ill, so he could not go.

雜文—As he was ill, he could not go.

單文—He could not go on account of his illness.

同上—His illness prevented (又は kept) him from going.

複文—He was very old and infirm, and so he could hardly work. (彼は餘程年をとって弱つてゐた、だから稼ぐことが出来かねた)

雜文—He was so old and infirm that he could hardly work.

單文—Being very old and infirm, he could hardly work.

同上—Owing to his age and infirmity he could hardly work.

同上—His age and infirmity made him hardly able to work.

單文の定義—單文は一の主辭と一の叙述辭より成る文である。

複文の定義—複文は同位接續詞を以って單文を二つ若しくは二つ以上繋ぎ合せたものである。

雜文の定義—雜文は従位接續詞を以って單文を二つ或は二つ以上繋ぎ合せたものである。

單文は主辭が一つと叙述辭が一つある文だとは前に述べた事であるが、若し主辭が二つあって叙述辭が一つのみであったら之を單文とすべきか又複文とすべきかといふに、それは場合によって違ふのである。例へば

Both he and I are to go. (あの人も私も行く筈です)

He and I are great friends. (あの人と私は親友です)

といふ二文の中、上のは he is to go, and I am to go, too. 即ち彼が行く筈であるし私も亦行く筈であるといふことを一文に合せて述べたものであるから、動詞は are の一詞であるけれども、その實は二つ即ち is と am とであって、複文の性質を具へてゐる。然るに第二に於ては主辭の he と I とが and を以って密接に繋ぎ合せたのであるから、第一の場合の如く之を二つの clauses に引分けることが出来ない。試みに之を分けて he is a great friend, and I am a great friend として見ても、意味のない言葉となる。何故なれば親友といふものは二人相集って出来得べきものであって、一人一人に分れては成立たぬものだからである。「彼は親友です」といふ言葉は誰と親密の關係を持つてゐるといふのであるか更にわからない。故にかくの如く主辭を別に分けることの出来ない文は、主辭が二つあ

ても矢張り單文だといはねばならぬ。

Tom and Jim are good boys.

の如きも二つに分けて

Tom is a good boy. Jim is a good boy.

ともいへるが、

Tom and Jim helped each other. (トムとジムとが互に助け合った)

の如きは二つに分けることが出来ない。トムが互に助け合ったといふことは、トム一人についていへることではないからである。そこで上の文は複文、下の文は單文としなければならないのである。

次に叙述辭が二つあって之に對する主辭が一つしかない時には如何といふに、之は必ず複文である。例へば

He went yesterday, and will come back to-morrow. (彼は昨日行きまして明日歸つて來ます)

He is unwell, and will not come.

の如きは各々叙述辭を二つづゝ持つてゐるが、何れも二つに分つことが出来る。即ち

He went yesterday. He will come back to-morrow.

He is unwell. He will not come.

としても意味を失はない。故にこれは複文である。

又主辭が二つで叙述辭も二つあるけれども、叙述辭の主部たる動詞が同じであるが爲めに一方が略せられた場合には、その文は勿論複文である。例へば

He likes grapes, but not I. (彼は葡萄を好むが、私は好みません)

といふ場合に、「好む」といふ動詞は前の clause にも後の clause にも用ひられる筈であるから、便宜上後のを略したといふまでである。随つてかくの如き文は複文である。

and or there,

練習問題

十六

下の文につき文の種類を述べ、複文・雑文ならば其の接合辭を指示せ。

1. I think that he is gone to China.
2. Putting out the lamp (ランプを消して), I went to bed.
3. My brother is out (外出して), but his wife is in (在宅して).
4. Satō was out, so I could not see him.
5. These are all the English books I have.
6. As he did not agree with me, I gave up the plan.
(あの人が賛成しなかったから私はあの企をやめました)
7. They went on an excursion, Tom alone remaining.
(トムが一人残って皆な遠足に出た)
8. When the war ended, the general retired to his native place.

- (戦争が止んだ時に大將は郷里に退隱した)
9. The war ending, the general retired to his native place.
 10. Write it if you can.
 11. Go and ask if my coat is ready.
(行って私の上衣が出来て居るか聞いてお出で)
 12. He is going down to Kyōto, but not I.
 13. Satō and Gotō had a quarrel between them.
(佐藤と後藤が二人で喧嘩をした)
 14. Our teacher being taken ill, was sent to hospital yesterday.
(先生が病氣になって昨日入院しました)
 15. Our teacher was taken ill, and was sent to hospital.
 16. Are you going to write it with pencil?
 17. I don't know what has become of it.
(私はそれが何うなったか存じません)
 18. I wrote it while you were out.
 19. At this he was greatly surprised and then grew angry.

(之を見て大に驚きそれからまた憤怒しました)

20. I am sure that he will succeed.

21. It would be impossible for him to translate it without the help of a dictionary.

(字引の助けなしには彼がそれを譯すことは出来ずまい)

22. You can't see it when the sky is clear.

二十九 文の種類(二)——文の種類をその構造即ち組立の方から分けると前節に述べた通り單文・複文・雜文の三つになるが、今若し之をその使ひ途即ち効用の方から分けると四種類に分れる。第一は疑問・質問の文、第二は命令・依頼の文、第三は咏嘆・感動の文、第四は此の三種類を除いた外のものであって、普通の方法を以て思想をあらはし事實を述べるものである。之を宣明の文と名づける。此の四種を英語では

1. *Declar'ative* (デ、クララト、イ、ヅ、又 *asser'tive* ア、サ、ア、ー、ト、イ、ヅ) *sentence* [宣明文].

2. *Inter'rogative* (インタロガト、イ、ヅ) *sentence*

[疑問文].

3. *Imper'ative* (インペラト、イ、ヅ) *sentence* [命令文].

4. *Exclam'ative* (エキスクラマト、イ、ヅ) *sentence* [感嘆文].

といふ。

以上四種の中、宣明文は普通の體で思想をあらはし事實を述べるのであるから、文の組立も通常的方式による。

Tom writes well. (トムが上手に字を書く)

I think it is very difficult.

是等は皆宣明の文である。宣明の文の終りには (.) (之を *pe'riod* ビー、リ、ョ、ドといふ) を附けるが常である。

疑問文はその名によっても知れる如く他人に物を問ふ文であるが、此の體では疑問語例へば *what?* *which?* *who?* *why?* *when* (何時)? *how?* *where?* 等があれば文の頭に置かれ、主辭が通常動詞或は助動詞の下に置かれ(宣明文では主辭が第一の位置に立つ)、且つ文の終りに疑問の記

號? (之を interrogation mark インタロゲーション マーク、又は ques'tion mark クェスチョン マークといふ)を附ける。

Does Tom write well? (トムは旨く書くか)

Do you think it is difficult? (君はそれがむづかしいと思ふか)

What do you want?

Where are you going?

是等は皆疑問文である。

命令の文は物をいひつけ或は頼み或はすゝめるに用ひる文であつて、特別の場合でなければ主辭を略して置く。而してその略せられた主辭は何時でも you である。文の終りには宣明文の如く (.) を附ける。但し命令或は號令を大聲を以て激しく下す時には感嘆文の如く ! を附ける。かゝる場合にはその文は感嘆文と命令文を兼ねたものとなる。

Please write a letter for me, Tom. (トムさん私に手紙を一本書いて下さい)

Be off, you fool! (出て行け、馬鹿者め)

Go and see if dinner is ready. (御飯の仕度が出来てるか見て來い)

是等は皆命令文である。

次に感嘆の文は事實や感想を感情的に述べるものであつて、通常頭に what (何たる、何と) 又は how (如何ばかり、何と) を頂き、終りに至つて! (ex'clama'tion mark エキスクラメーション マークといふ) が附けられる。その主辭や動詞の順序は通常宣明文と同様であるが、唯だ how, what に附屬する形容詞・副詞・動詞だけが how や what の次即ち主辭の前に立つだけが違ふのである。

What a good hand Tom writes! (トムは何たる旨い字を書くのであらう)

How well Tom writes! (トムは何と旨く書くではないか)

How beautiful this morning is!

What a beautiful morning this is!

} (今朝は何と

麗しい朝だらう)

以上の四種の文は各多少形を異にしてゐるけれども、場合によっては同じ事を此の中の二種にでも三種にでも言ひ得られることがある。例へば「天氣が非常に好い」

といふことを宣明文でいへば

It is very fine weather.

となり、疑問文でいへば

Isn't it very fine weather?

となり、又感嘆文でいへば

What fine weather it is!

といふことが出来る。

Please go fetch it. (何うか行って取って来て下さい)

是は依頼をあらはす命令文であるが、是と同じ意味を宣明文であらはすことも出来る。

You will please go fetch it.

又疑問文で

Will you please go fetch it?

といつても同じことである。但し同一の事をおかくの如く二種類または三種類の文體でいひあらはす場合には、意味は同じであるには相違ないけれども、之をいふ人の心持は多少違ふのである。故に初學者は文の種類を見分ける時に當って唯だ意味ばかりに目を附けないで、前に擧げた文の構造即ち組立に注目し、又その精神即ち心持をよく考へて判断しなければならないのである。

宣明文の定義—宣明文は事實・感想を普通の形に書きあらはした文である。

疑問文の定義—疑問文は事を問ふ文である。

命令文の定義—命令文は命令・請求・

依頼をあらはす文である。

感嘆文の定義—感嘆文は事實・感想を感情的にあらはす文である。

練習問題

十七

下の文につき効用上より種類を分て。

1. What a fool I was to commit such a mistake!
(そんな誤をすることは私は何たる馬鹿者であつたらう)
2. Do you think I am a fool?
3. Show me some other pencil.
4. I want to call on Mr. Katō.
5. What could he do without money?
6. He was glad to have his son at home again.
(息子が再び家に居ることになったのを悦んだ)
7. How glad he was to have his son at home again!

- 8. He lived in England when he was very young.
- 9. Take any flower in your hand and look at it.
- 10. Doesn't a duck feel cold in winter?
- 11. When I saw him, I remembered that I had seen him somewhere before.
(私がその人を見かけた時に、前に何處かて逢ったことがあるといふことを想出した)
- 12. When did you leave Ōsaka?
- 13. Do you gain by being idle?
(怠けて得をしますか)
- 14. I bought them at three yen a dozen.
- 15. Have you ever seen a tiger?
- 16. Tell me who you are.
- 17. What a pity it is that he should have failed again!
(またシクジッタとは何たる残念な事だらう)
- 18. Which do you want, a pen or a pencil?
- 19. What you say is all true.
- 20. Make haste, and catch that train.
(急げそうしてあの汽車に乗れ)
- 21. Where was he employed when he grew older?
- 22. How do you like it?
- 23. How large it looked!

第四講

八品詞の分類

一、名詞

三十 名詞の種類——名詞は通常下の如き四種類に分たれる。

一、普通名詞即ち *com'mon noun* (コンモンナウン)

二、固有名詞(或は特別名詞といふ)即ち *prop'er noun* (プロプターナウン)

三、物質名詞(或は材料名詞といふ)即ち *mate'rial noun* (マテリアルナウン)

四、抽象名詞即ち *ab'stract noun* (アブストラクトナウン)

三十一 普通名詞——凡そ物には、略ぼ一定の形と大きさのあるものと、形と大きさの全く定って居ないものがある。例へば「牛」は大きさが大概定って居るけれども、「牛乳」「牛肉」には定って居な

アラ、した、い、わ
キツスしませう

い。故に「牛一つ」といふ事は分るけれども、「牛乳一つ」「牛肉一つ」といふ事は誰にも分らない。随ってかくの如き言葉を用ひるものはない譯である。又「金指環」「金時計」は形の大概定つたものであるけれども、「金」にはさる形がない。故に吾々は「金指環一つ」「金時計二つ」などいふことはあつても、「金一つ」といふことは決して言はない。此の「牛」「金時計」の如き略ぼ一定した形と大きさのある物の名を普通名詞といふ。Cow, watch, man, pen, book, city, starなどはこれである。

次に名詞即ち名には、一種類に屬する物全體に通じて用ひられるのと、同種類中の特殊の一個或は一部分に限って用ひられその他には通用しないのとの別がある。例へば hero (英雄) と Napoleon との區別の如きものである。Hero は英雄・豪傑と名づけられ得べき種類の人一般に通ずる名であるから Alexander にも Cæsar にも成吉思汗にも太閤にも通じて當てはまるが、之に反して Napoleon といふ名は特殊の一人或は一族の人だけにはまるのであつて、他の英雄 Alexander

や太閤には通じない。City と London, empire と Japan, man と Roosevelt, horse と池月, park と日比谷の如き名にも、皆同様の區別がある。而して此の hero, city, horse の如き同種類中の何れにも用ひて差支へない方のものゝ名を、普通名詞といふ。

又凡て物には何か性質がある。獅子には「強い」といふ性質があり、砲彈には「堅い」といふ性質があり、花には「美しい」といふ性質がある。而して此の強・堅固・美といふ性質は唯だ獅子と砲彈と花とに限つたものかといへばそうではなく、力士にも鯨にも「強い」といふ性質が具はつて居り、釣鐘にも齒にも「堅固」といふ性質が具はつて居り、繪畫や月にも「美しい」といふ性質が具はつて居るのである。そこで吾々は獅子・力士から「強い」といふ性質を引離して「強」といふ名稱を造り、砲彈や釣鐘やから「堅い」といふ性質を引離して「堅固」といふ名稱を造り、花や月杯から「美しい」といふ性質を引離して「美」といふ名稱を造るのである。かくの如く具象體即ち實

物から抽象體即ち無形の性質を造り出し、之を抽象名詞と名づけ、又性質を具へた具象物を普通名詞と稱へる。strength, (強さ、力) hardness (堅固) beauty (美) は即ち抽象名詞で lion, whale, (鯨), wrestler (力士); shell (砲彈), tooth, (齒), bell (釣鐘); flower, moon, picture は即ち普通名詞である。

以上述べ來たことを一つにまとめると、略ぼ一定の形を具へた具象體即ち有形物の名であつて一種類中の何れにも通じて稱呼することの出来るものが即ち普通名詞である。Common noun の common は共通の意味であつて、普く一種類内に通ずるといふ所から斯く名づけたのである。

普通名詞の定義—普通名詞は一種類を爲す具象體中の何れにも通ずる名である。

ト二 固有名詞—前に hero と Napoleon を比較した場合に述べた事であるが、hero は普通名詞であるから、hero 即英雄豪傑といはるゝ一種

類の人の中の誰にもあてはまる名であるけれども、Napoleon は多くある英雄の中特殊の一人に限り、或は Napoleon と稱する一族の人に通ずるのみ名であるから、之を普通名詞と區別して固有名詞といふ。一種類中特殊の一人或は一部分に固有或は特有であるといふので、斯く名づけたのである England, Paris, (the) Yellow River, (黄河), (the) Alps (アルプ山脈) 等の如き地名、Frederick, Franklin, Hideyoshi の如き人名は言ふまでもなく、(the) "National Readers" の如き書籍の名、(the) "Tōkyō Asahi," (the) "Taiyō" の如き新聞雑誌の名、Tokyō Middle School (東京中學校), (the) Central Hotel (中央旅館), (the) Nihon Red Cross Society (日本赤十字社), (the) Bank of Japan (日本銀行), (the) Imperial Gas Company, (the) Yasukuni Shrine, Honganji 等の如き學校、店鋪、會社、銀行、神社、佛閣、教會の名も皆固有名詞である。

固有名詞は最初の字を大文字に書かなら
はならん。 上の例を見よ。

固有名詞の定義—固有名詞は一種類中の特殊の一個或は一部分に限り稱呼し得べき名である。

固有名詞の中には一詞のみでなく二詞三詞或はそれ以上も集合して出来て居るのがある。Mrs. Katō は二詞、Mr. Katō Tarō は三詞、the Duke of Wellington は四詞、Kurō Hōgan Minamoto no Yoshitsune は五詞から出来て居る。かくの如く数は如何に多くても一物一人を指す以上は其の名は一名詞と認めねばならん。

三十三 物質名詞—前に普通名詞を説明する時に述べた如く、牛は略ぼ一定の形と大きさを具ふる物であるが、牛乳や牛肉には形状大小にきまりがなく、随って一滴でも千石でも牛乳は牛乳といひ、油は油といふことを得るが、牛はそうでない、頭・尾・足・角・胴體を具へたものでなくては牛といふ名を附けることが出来ない。そこで牛の如く一定の形や大きさを具へた物の名を普通名詞といひ、之を具へない有形物の名を物質名詞といふ。前に言った牛乳・牛肉・油はまた一定の形と大きさのない物であるから、自然一つ二つと數へることが出来ない(但し一升とか一

斤とか他の名詞をつけて呼ぶことは出来る)。之に反して牛の如きは一つ二つと數へることが出来る。此の一二三等の數を以て數へられると數へられぬとによって普通名詞と物質名詞を分つことが出来る。下の比較を見よ。

| 普通 | 物質 | 普通 | 物質 |
|-------------|-----------|----------------|-------------|
| cow | beef | coat | cloth (羅紗) |
| knife | steel (鋼) | lamp | oil |
| lump (かたまり) | sugar | gun | powder (火薬) |
| coin (貨幣) | silver | tongs (火箸) | fire |
| dish | soup | air-ship (空中船) | air |

物質名詞はツマリ物を造る原料材料と物の自然に出来て居る物質の名だとも云へる。即ち金屬・瓦斯體・液體・穀類・粉末・肉類などの名は皆之に屬する。

物質名詞の定義—物質名詞は物質や物を造る原料の名である。

三十四 抽象名詞—抽象物の名が抽象名詞であるといふとは既に前に説いた。而して此の抽象物といふは、有形具象の物例へば花の如

き物の中から吾々の思考力で以て其の性質例へば美といふが如き物を抜き取り引き出して、一種の物の様に考へるのである。故に美とか堅固とかいふ物は決して花や鐵の如き具象物を離れて存在して居るものではない、唯だ吾々人間が其の脳力で引き離して考へるといふだけの物である。吾々はまた物の性質ばかりでなく其の行爲動作を抽出して抽象物にする。讀むとは人のする行爲、歩行は動物の動作であるが、吾々はまた人や動物から此の行爲動作を引離して讀書・歩行といふ物の存在を認めて居る。「讀書は至上の樂みだ」とか「歩行は健康に有益だ」などいふ場合の讀書・歩行は抽象的である。そこでreading(讀書), walkの如きも beauty(美), hardness(堅固)の如き性質の名と同様に抽象名詞といふ。此外に吾々は上にいふ如き動作行爲を起させる無形の物の存在を認めて居る。例へば吾々は考へるといふ動作を起さしめるのは心(mind)であるといひ、想像を起さしめるのは想像力(imagination)であると思つて居る。か

くの如き行爲動作の動力たる物も亦抽象名詞に屬する。尚ほ性質の名も一種の抽象名詞である。下の表につき比較せよ。

性質の名

| 普通 | 抽象 | 普通 | 抽象 |
|-----------|------------------|---------------|--------------|
| man (男) | bravery (勇) | flower | colour |
| | manliness (男らしさ) | engine (蒸汽機關) | power (力) |
| woman (女) | tenderness (柔しさ) | sun | brightness |
| | | pole (棹) | length |
| arrow (矢) | swiftness (速さ) | hero (英雄) | heroism (英氣) |

行爲の名

| 普通 | 抽象 | 普通 | 抽象 |
|-----------------|--------------|-----------------|----------------|
| acroplane (飛行機) | flight (飛行) | speaker (論者・辯士) | speech (言論・言語) |
| singer (歌うたひ) | singing (唱歌) | soldier | march (行進) |
| boat | race (競漕) | dog | bark (吠) |
| pen | writing | | |

行爲の動力の名

| 普通 | 抽象 | 普通 | 抽象 |
|------------|---------------------|---------|----------------|
| youth (青年) | spirit (元氣) | scholar | knowledge (知識) |
| animal | life (生命) | | |
| eye | sight (視力) | student | purpose (志・目的) |
| head | understanding (理解力) | man | courage (勇氣) |

状態の名

| 普通 | 抽象 | 普通 | 抽象 |
|--------------|--------------|-------------|---------------|
| patient (病人) | illness (病氣) | rioter (暴徒) | disorder (動亂) |
| country (國) | peace (平和) | house | ruin (壊敗) |
| safe (金庫) | safety (安全) | bed | sleep |
| corpse (屍體) | death (死) | | |

抽象名詞は多く形容詞や動詞から出て来た名詞である(又抽象名詞が其の反對に形容詞・動詞の元になって居る場合もある)。故に抽象名詞と形容詞・動詞とは形體が全く同じか或は類似して居る場合が多い。隨て詞の形のみを見て判断をすると間違ふことが少くない。これは讀書の際特に注意すべきことである。下の比較表を見よ。

| 形容詞 | 抽象名詞 | 形容詞 | 抽象名詞 |
|-----------------|---------------|---------------|----------------|
| safe (安全な) | safety (安全) | white (白い) | whiteness (白) |
| good (善き) | goodness (親切) | hard (固い) | hardness (堅固) |
| kind (親切な) | kindness (親切) | loyal (忠義の) | loyalty (忠義) |
| ill (病んで) | illness (病氣) | sincere (誠實の) | sincerity (誠實) |
| beautiful (美しい) | beauty (美) | | |

| 動詞 | 抽象名詞 | 動詞 | 抽象名詞 |
|-------------------|--------------|----------------------|----------------|
| walk (歩く) | walk (歩行、散歩) | stop (とまる) | stoppage (停止) |
| number (数が...ある) | number (數) | study (研究す) | study (研究) |
| amount (額が...に達す) | amount (額) | measure (計る) | measure (量・度) |
| show (見せる) | show (見え、外見) | thought (考へた) | thought (思想) |
| | | dream (夢みる) | dream (夢) |
| | | regret (残念に思ふ、遺憾とする) | regret (残念・遺憾) |

| | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|--------------|
| civilize (開けしむ) | civilization (文明) | bind (縛る、製本す) | binding (製本) |
| collide (衝突す) | collision (衝突) | encourage (奨勵) | courage (勇氣) |
| express (表現す) | expression (表現) | | |
| explode (破裂す) | explosion (破裂) | inquire (尋問す) | inquiry (尋問) |

三十五 集合名詞と多数名詞——文法家が名詞を分類すると大抵以上の四種とする。此外に普通名詞の中に集合名詞と名のついた一種がある。これは聚合體或は團體の名である。Regiment (聯隊), class (級), nation (國民) の如き皆な人の聚合體の名であるから此類に屬する。Artillery (砲兵) の如く砲や人や馬の集團の名でも、jewelry の如き寶石の集合でも矢張集合名詞である。此名詞は前述の如く普通名詞の一種であるから其の中に含み込まれるのである。集合名詞は英語で *collective noun* (コレクティブ ナウン) と稱へる。

又文法上で多数名詞と呼ぶ一種の名詞がある。これは其の形體から見ると、詞尾にsがないから一の物を指す様に見えるが、然かも實は二個以上の物を指すのをいふ。集合名詞の例

に擧げた class は級を一團體と見る時には前に
言った如く集合名詞であるが、之を其の級の生
徒と見る時には多数の生徒を指すから多数名
詞となるのである。

Twenty new-comers form a class. (新入學者二
十名が一級を爲して居る)

此 class は一團體を形づくって居るといふから一
集團の名即ち集合名詞である。然るに

Our class divided in their opinion. (僕の同級生
は意見を異にした)

の如き場合には級が一團となって意見を異に
したのではなく、其の級の生徒が二つ三つ或は
四つ五つにも分れて各説を異にしたといふの
であるから、これは多数名詞となったのである。

此くの如く或名詞は同一詞でありながら其
の意味と用ひ方によって或は集合名詞となり
或は多数名詞となるのである。 Artillery (砲兵),
infantry (歩兵), cavalry (騎兵), cabinet (内閣), gentry
(縉紳), peasantry (小作農夫社會), people, jury (陪審
團)等も皆な此の類に屬するから、一團體の名と

しては集合名詞であるが、若し之を artillerymen
(砲兵科の兵士), foot-soldiers (歩兵科の兵士), caval-
rymen (騎兵科の兵士), cabinet (内閣員), gentlemen
(紳士), peasants (小作人), people (世人) (國民即ち
nationの義に用ふれば集合名詞である), jurors (陪
審人)の意味に使ふ時には多数名詞になるので
ある。多数名詞も普通名詞の一種に違ひない。
英語では之を noun of mul'titude (ナウン オヴ マ
ルトィチュウド)と稱へる。

前に言った如く多数名詞は其の意味が複數
であつて少くも二人以上の人を指すのである
から、之を主辭とした時はそれに對する動詞も
必ず複數、また之を代表する代名詞も必ず複數
になるのである。下の例を見よ。

集合名詞

多数名詞

Another European people
is to take part in the war.
(別に今一つの歐洲の國民
がその戰に加はることにな
つて居る)

Don't care about what
those foolish people say.
(あんな馬鹿者のいふこと
を顧慮するな)

The **infantry** made another bayonet charge (歩兵隊は今一度銃槍突貫をやった), and was again **repulsed**. (が再び撃退せられた)

The **infantry** were killed to a man, **their** arms (having been) all broken. (歩兵は武器が皆な折れて一人も残らず殺された)

この集合名詞は皆単数であるが、併し people 即ち國民が二以上或は歩兵隊が二種以上ある時には矢張複數となり得べきも勿論である。例へば

Two other peoples are to take part in the war.
の如してある。

練習問題

十八

下の文につき名詞を指示し、且つ其の種類をいへ。但し普通名詞については、集合或は多數名詞ならば孰れなるかを云へ。

1. Wellington was a great general who lived about a hundred years ago.

2. So Mr. Johnson went to the post-office to see his friend.

3. Thus the cavalry scarcely got time to take their lunch.

(かくて騎兵等は中食をする暇を得兼ねた)

4. These pens are not of pure gold.

5. Don't throw stones at those harmless animals.

6. How much coal do you want?

7. These clothes are made of cotton cloth.

8. The Baltic Squadron was almost annihilated.

(バルチック艦隊は殆ど全滅した)

9. Those ships all came from the Baltic Sea.

10. People say that the count will shortly be sent to China.

11. What is the matter with him?

12. What is beauty?

13. Rice has risen in price.

14. Will your class join the party?

(君の級はその仲間に加はるのか)

15. I shall never forget their kindness.

16. Sugar is made from beet and sugar-canes.

17. The Duke of Wellington defeated (破った) the French at Waterloo.
18. Have you ever read Miyai's "Class-Book of English Grammar"?
19. The Russians had three regiments of field artillery in reserve.
(露軍は野戦砲兵を三個聯隊豫備に持って居た)
20. Truth cannot always be easily found.
(真理は必ずしも容易に見つかるものでない)
21. Take these books to Mrs. Smith and get her receipt for them.
(此の本をスミス様の奥様へ届けあの方の請取書を貰って来い)
22. I saw him at the office of the Imperial Gas Company (帝國瓦斯會社の事務所).
23. Will you write your composition with pen and ink?

二、代名詞

三十六 代名詞の分類——代名詞は通常下の四種に分たれる。

一、人稱代名詞即ち *personal pronoun* (パーソナル プロナウン).

二、關係代名詞即ち *relative pronoun* (レラトイヴ プロナウン).

三、疑問代名詞即ち *interrogative pronoun* (インタロガトイヴ プロナウン).

四、指示代名詞即ち *demonstrative pronoun* (ディモンストラトイヴ プロナウン).

三十七 人稱代名詞——代名詞の中人稱の初めから定まって居るのを人稱代名詞といふ。さて此人稱といふはどんなものであるかといふに、その代名詞(或は名詞)が自己を指すか、話相手を指すか、或は他の人或は物を指すかの區別である。例へば吾々は自己を指して I, my, me などといふが、話相手のことは you, your など、いひ、又他の人を指しては he, his, him などといひ
in Europe and America.

ふ。此の區別を人稱といふのである。人稱は英語で *per'son* (パーソン) といふ。人稱は三種類あって、話し或は書く人自身を指す名詞・代名詞を第一人稱 (*first per'son* ファースト パーソン) といひ、話合手又は讀者を指す名詞・代名詞を第二人稱 (*second per'son* セカンド パーソン) といひ、他の人或は物を指す名詞・代名詞を第三人稱 (*third person* スード パーソン) といふ。I, we, my, us などは第一人稱、you, your の如きは第二人稱、he, she, it, his, them の如きは第三人稱である。かくの如く人稱の自然に定って居る代名詞が即ち人稱代名詞である。

人稱代名詞の定義—人稱代名詞は人稱の自然に定って居る代名詞である。

三十八 關係代名詞—*Clause* と *clause* を繋ぎ合せるには時々一種の代名詞を使ふ必要を感ずる。例へば *this is a house* と *Jack built a house* と二つの *clause* があるとして、之を一つに合せる時

には代名詞 *that* を使って

This is a house that Jack built. (これはジャックの建てた家です)

とする。又 *a man wants to see you* (あなたに御面會したいといふ人があります) と *shall I show him in?* (その人を御案内しませうか) の二つの *clauses* を繋ぎ合すとすれば代名詞 *who* を使って

Shall I show the man who wants to see you? (あなたに御面會したがつてる人を御案内しませうか)

といふのである。此の *that* と *who* は *house* と *man* を代表して居るから代名詞の一種であって、且つ *clause* と *clause* とを繋ぎ合せて居る。かくの如きものを關係代名詞即ち *relative pro'noun* (レラティブ プロナウン) といふ。

關係代名詞の定義—關係代名詞は *clause* と *clause* を結び合せる代名詞である。

關係代名詞は *who, which, that* 等である。

關係代名詞が指す人或は物の名を先現辭即 *an'tecedent* (アントィスィーデント) といふ。上の例に於て *that* の指す物の名は *house*, *who* の指す人の名は *man* であるから、此の二名詞は共にその先現辭である。

三十九 疑問代名詞—問をかけるに使ふ代名詞を疑問代名詞即ち *in'terrog'ative pro'noun* (インテロガトィヴ プロッナウン) といふ。 *Who?* *what?* *which?* の如きは皆それである。

疑問代名詞の定義—疑問代名詞は問をかけるに使ふ代名詞である。

疑問をかけるに使ふ詞の中には *when?* *how?* *where?* *why?* などいふ詞もあるが、是等は所謂疑問副詞といふものであって、代名詞とは種類が違ふ。是等の詞は名詞の代りに主辭・目的辭に使ふことが出来ないのであるから、勿論代名詞ではない筈である。

四十 指示代名詞—「あれ」「これ」などと物を指示する代名詞を指示代名詞即ち *demon'strative pro'noun* (ドィモンストラトィヴ プロッナウン) といふ。 *This*, *that*, *these*, *those* の如きは此の類に屬する。

指示代名詞の定義—指示代名詞は何れを指すかを指定する代名詞である。

【注意】 上の例に挙げた *this*, *that*, *these*, *those* の四詞は名詞の前に附けられた場合には代名詞ではなく形容詞となるのである。

This is my book.

This book is mine.

此の二文は同一の事物について言つて居るのであるけれども、前の *this* は代名詞、後の *this* は形容詞である。

四十一 不定代名詞—*One* 或は *anything* 或は *everything* といふが如き詞は、物の名ではなく物の名の代りに使ふ詞であるから、矢張り一種の代名詞と見なければならぬ。然もこれ等の代名詞は、唯だ「者」とか「何か」とか或は「誰でも」とかいふが如き指し所の曖昧な詞であるから、之を不定代名詞即ち *indefinite pro'noun* (インデフィニト プロッナウン) といふ。

不定代名詞は多くの文法書に別の一種類としてはないので、指示代名詞中に組み入れてある。それ故此の講義にも之を前の四種類の中には加へずして、別に此處に附記して置く。

不定代名詞の主なるものは、one, somebody, anybody, nobody, everybody, something, anything, nothing, everything, aught, naught 等である。

練習問題

十九

下の文につき代名詞を指示し、その種類をいへ。

1. Have you got anything to eat?
2. What have you done with yours?
(あなたのを何うしましたか)
3. He gave me a very large one.
4. This is the house in which my grandmother used to live.
5. He was a great general who lived about a

hundred years ago.

6. Which do you like better, this or that?
7. These pencils are not mine. They all belong to your brother.
8. The widow is a woman whose husband is dead.
9. I think it is true, for everybody says so.
10. Whom are you going to see?
11. I don't know what it is.
12. Is this the one that Mr. Smith gave you as a New-year's gift?

三、形容詞

四十二 形容詞——形容詞は通常下の四種類に分られる。

一、性狀形容詞即ち *qualitative adjective* (クォリタトイヴ アヂェクトイヴ)

二、數量形容詞即ち *quantitative adjective* (クワントイタトイヴ アヂェクトイヴ)

三、指示形容詞即ち *demonstrative adjective* (ドイモンストラトイヴ アヂェクトイヴ)

四、關係形容詞即ち *relative adjective* (レラトイヴ アヂェク トイヴ)

四十三 性狀形容詞——形容詞の中で物の性質や状態をあらはすのを性狀形容詞といふ。「堅い」即ち hard, 「親切な」即ち kind, 「重い」即ち heavy, 「鶯色の」即ち brown, 「早い」即ち early, 「疾き」即ち swift, 「賢明な」即ち wise の如きは性質をあらはす形容詞であって、「病んだる」即ち sick, 「静な」即ち quiet, 「怒ったる」即ち angry, 「憂へた」即ち sad, 「新しい」即ち new の如きは状態をあらはす形容詞であるから、何れも此の類に属する。要するに形容詞の十中の八九は性狀形容詞である。英語では *qualitative adjective* (クォリタトイヴ アヂェク トイヴ) といふ。

性狀形容詞の定義——性狀形容詞は物の性質・状態をあらはす形容詞である。

固有名詞——固有名詞から出来た形容詞、例へば Japan から出た Japanese, England から出た English の如きものを固有名詞と稱へる。即ち *proper adjective* である。こ

れは斯くの如く別の名稱をつけるけれども、性狀形容詞の一種に外ならぬのである。下に固有名詞の重もなるものと其の出處を示して置く。

| 固有名詞 | 固有名詞 |
|-----------|-------------------|
| Britain | British (英國の) |
| America | American (米國の) |
| China | Chinese (支那の) |
| France | French (佛國の) |
| Germany | German (獨逸の) |
| Russia | Russian (露國の) |
| Italy | Italian (伊太利の) |
| Austria | Austrian (奧太利の) |
| Spain | Spanish (西班牙の) |
| Holland | Dutch (和蘭の) |
| Ireland | Irish (アイルランドの) |
| Scotland | Scotch (スコットランドの) |
| Africa | African (亞非利加の) |
| Australia | Australian (濠洲の) |
| Asia | Asiatic (亞細亞の) |
| India | Indian (印度の) |
| Rome | Roman (羅馬の) |

四十四 數量形容詞——物の數をあらはす形容詞を數量形容詞といふ。「三つ」即ち three, 「百」即ち a hundred, 「澤山の」即ち many, 「少々」即ち a few 又は some, 「若干の」即ち several 等はこれに属する。

前に述べた如く或る物例へば金屬・液體・氣體

・穀類・薬品の如きものは、所謂物質又は材料と名づくべきものであって、一つ二つと数へないものである。かゝる物の名は皆物質名詞である。此の類のものについて吾々が數量をいふには、數をいはずして、分量をいふ。例へば「金十」「水百」「米千」などとはいはずして、「一匁の金」或は「少量の金」「十石の米」或は「澤山の米」などといふ。かくの如く分量を示すに用ひる形容詞も亦數量形容詞である。英語では數量形容詞を *quantitative adjective* (クァンティタトイヴ アデュクティヴ) といふ。A little, much, some, any, no の如きはその主なるものである。

數量形容詞の中、數をあらはす物は普通名詞に用ひ、量をあらはす物は物質名詞に使ふ。 若し數をあらはすものを物質名詞に用ひ、量をあらはす物を普通名詞に用ひたら、それは文法上の誤りである。故に several cups (數杯) は正しいけれども、many tea は誤りである。又 a little chaff (少しの糠) は正しいけれども、a few chaff は間違つて居る。

數と量の形容詞を比較すると下の通りである。

| 意味 | 數の形容詞 | 量の形容詞 |
|---------|---------|----------|
| 澤山の | many | much |
| 少し(ある) | a few | a little |
| 少い | few | little |
| もっと | more | more |
| 最も多き | most | most |
| 若干の | several | some |
| 若干の、少しの | some | some |
| 多少の | any | any |

數の形容詞の中、定つた數をあらはすもの即ち one, ten, a thousand の如きものを定數語即ち *definite numeral* (デフィニット ニュウメラル) といひ、定らざる數をあらはすもの即ち many, some, a few の如きものを不定數語即ち *indefinite numeral* (インデフィニット ニュウメラル) といふ。

A few と few—A few は「少しはある」といふ意味で肯定的に使ひ、few は「少い」或は「餘りない」といふ意味で否定に傾いた意味に使ふ。

I am glad that I have a few left. (私は少し残つて居るのを嬉しく思つて居ます。)

I am sorry to say I have few left. (残ってるのが少いからお氣の毒に思ひます、或はお氣の毒ですが餘り残って居ません)

A little と little—Few は數に little は量に使ふといふことだけ違ふけれども、little の a little に於けるは few の a few に於けると同じ關係である。故に little は「少い」「餘りない」といふ意味、a little は「少しはある」といふ意味である。

I suppose you have a little left in the bottle. (あの徳利に少しは残って居るだらう)

No, there is little left. (イヤ、餘り残って居ません)

Any と some—Any も some も數と量との兩方に使ふことが出来る。Any は通常疑問・否定に使ひ、some は肯定若くは疑問にあらざる文に使ふ。

Have you any {pens (數)? (あなたペンがありますか)
paper (量)? (あなた紙がありますか)}

Yes, I have some {pens (數). (ハイ、ペンがあります)
paper (量). (ハイ、紙があります)}

No, I have {pens (數). (イヤ、ペンはありません)
not any {paper (量). (イヤ、紙はありません)}

not any は no と同じである。故に此の文を

No, I have no {pens (數).
paper (量).}

と書き改めてもよいのである。

四十五 指示形容詞—「此の」「あの」などと物を指示す形容詞を指示形容詞といふ。前に挙げた this, that, these, those は勿論 such, yon, yonder, other, a certain, some, any の如きも此の類に屬する。英語では *demonstrative adjective* (ドイモンストラトイヴ アデクトイヴ) といふ。

These books are for you. (此の本はお前にやるのだ)

Is there a temple on the top of you hill? (向ふの山の頂上に寺がありますか)

指示形容詞の定義—指示形容詞は何れを指すかを示す形容詞である。

四十六 關係形容詞—關係代名詞 which, what

は名詞を形容しつゝ *clause* と *clause* を繋ぎ合せる効力がある。その場合には関係代名詞ではなく関係形容詞即ち *relative ad'jective* (レラトィヴ アヂェクトィヴ) となったのである。

I am ready to give for it **what** little money I have.

(私はその代りに持ってるだけの僅の金を皆やる心組です)

此の文に於て **what** は名詞 *money* を形容して、同時に前の *clause* 即ち I am ready to give for it と後の *clause* 即ち I have a little money とを結び合せて居るのである。又

He is very poor, for **which** reason he has to work

for his bread in the evening. (彼は極く貧窮て

ある、その理由で彼は晩に働かなければならぬ)

の **which** も亦名詞 *reason* を形容して同時に前の *clause* と後の *clause* とを繋ぎ合せて居る。若し此の詞がなかったら、二つの *clause* がバラバラに離れて意味がなくなる。関係形容詞は以上二種より外にないのである。

関係形容詞の定義—関係形容詞は名詞を形容し且つ *clause* と *clause* を結び合せる形容詞である。

四十七 個分形容詞と疑問形容詞—二つ以上の物を一個一個に分けて指示する形容詞を個分形容詞即ち *distrib'utive ad'jective* (ドィストリビュウトィヴ アヂェクトィヴ) といふ。Each, every, either, neither がこれに属する。是等の詞は前述の如く数あるものを一個一個に分ける意味の詞であるから、自然単数の名詞に添へて使ふ。複數に使へば誤りである。

Every nation has its own custom. (どの國民にも

皆特有の習慣がある)

I like **neither** book. (私はどちらの本も好ま

ない)

個分形容詞の定義—個分形容詞は二個以上の物につき一個一個に分けて指示する形容詞である。

個分形容詞はかくの如き性質のものであるから、或る文法書には之を別種類とせずして、指示形容詞の一種と定めてある。

Every と **each**.—Every は「一つ一つ皆な」といふことである。Each の方は「毎」と「各」の義である。Every は多く其の種類一般に就いて用ひ、each は多くは限ある数の物に使ふ。

I go to school **every** day. (私は毎日毎日學校へ行きます)

Each boy has a room. (兒童は銘々部屋が一つあります)

Every other は二つ目二つ目の義である、every three, every third は三つ目三つ目の義である。

Come **every other** day. (二日目二日目に來い)

Every fourth stripe is blue. (四本目四本目の縞が青い)

Each other は「二物が互に」といふ意味である。

A. and B. heiped **each other**. (互ひに力を貸しあった)

Each は代名詞にも使へるが、every は形容詞のみである。

Either と **neither**.—此の二詞は二つある物に就いて使ふ語である。Either は「二つの中何れか一つ」の義に、neither は「二つの中これもあれも—ない」といふ否定の意味に使ふ。

Either man will surely be beaten. (二人の中どちらか一人が屹度敗ける)

They will take **neither** side. (あの二人はどちらの側にも附かない)

之を代名詞として

You may take **either**. (二つの中どちらか一つ取ってよろしい)

I fear **neither** will please him. (どちらもあの人の氣に入らないだらう)

かくの如く使ふことも出来る。此の二詞は副詞にも使ひ、又 either—or, neither—nor とつゞけば接續詞にもなる。

疑問代名詞 what? which? は形容詞として名詞或は他の代名詞 one に添へて用ひることが

出来る。

Which book do you prefer? (君はどちらの本を好むか)

What book do you want? (どんな本が欲しいのか)

かゝる場合には疑問形容詞即ち *interrogative adjective* (インタロガトイヴ アヂェクトイヴ) になったのである。

此の what はまた感嘆の義に使ふ。

What a beautiful flower it is! (なんといふ美しい花でせう)

練習問題

二十

下の文につき形容詞を指示し、且つ其の種類をいへ。

1. Give me some black ink.
2. The Napoleonic war ended with this battle.
(ナポレオン戦役は此の一戦で終った)
3. I don't know which way to take.

4. Has that boy any money with him?
(あの兒は多少金銭を持合せて居ますか)
5. I began English next, which language at first seemed to me very difficult.
(私は次に英語を始めましたがあの語は初めは私に餘程六ヶしさうで御座いました)
6. Few men can be so happy.
(あんなに幸福に暮せる人は少い)
7. I have no other English books.
8. What sort of a book do you want?
9. In a little while the sly fox came back.
10. What a fine morning this is!
11. Show him some more pictures.
12. I never saw such a fool.
13. Can you come on every three days?
14. I must say that we have made little progress in this subject.
(此學科には吾々は餘り進歩しないと言はなければならん)
15. He sat silent and sad.

四、動詞

四十八 動詞の種類——動詞は分類の仕方によって色々分れる。即ち目的辭の有無から見れば自動詞・他動詞となり、補辭の要ると要らぬとによって見れば完全動詞・不完全動詞となり、過去分詞の形より區別すれば正則動詞・變則動詞となり、動詞本來の用を爲すと否とによって分れば正動詞・準動詞となる。先づ自働・他働から説起して追々他の種類に論及しよう。

四十九 自動詞と他動詞——動詞の中に目的辭を要するものと要せざるものゝ區別あること、並びに目的辭を要するものを他動詞といひ、目的辭を要せざるものを自動詞といふことは既に第六十五頁第廿六節に説いて置いた。さて此の他動詞を英語で *tran'sitive verb* (トランスィトィヴ ヴァーブ) といひ、自動詞を *intran'sitive verb* (イントランスィトィヴ ヴァーブ) といふ。

自動詞と他動詞の定義—動作が之

を爲すものから出て他の物に及ばない時は之をあらはす動詞を自動詞といひ、他の物に及ぶ時は之をあらはす動詞を他動詞といふ。

Dative verb.——他動詞の中に目的辭が二種類要るのがある。例へば

He gave me a parcel. (彼は私に小包を一つ呉れた)
 の gave の如きである。此動詞は me と a parcel と二つの目的辭を具へて居る。此の二目的の中「……に」といふ方を間接目的 (*indirect object* インディレクト オブヂェクト) といひ、「……を」といふ方を直接目的 (*direct object* ディレクト オブヂェクト) といふ。前例に於て me は間接目的 a parcel は直接である。間接は直接目的の前に置かれる。上に述べた類の動詞を *verb with a double object* (即ち二目的動詞) といひ、また *dative verb* (データィヴ ヴァーブ) といふ。此の動詞の中の重なるものは下の通りである。

- | | |
|-----------------|--------------------|
| ask (問ふ) | make (作てやる) |
| bring (持て来る) | offer (すゝめる、提供す) |
| buy (買ふ) | pay (拂ふ) |
| carry (運んで来る) | pour (注いでやる) |
| cost (費用が……かかる) | present (贈呈す) |
| deliver (渡す) | promise (やらうと約束する) |
| deny (いなむ、否定す) | read (読んで聞かせる) |
| do (……してやる) | sell (賣る) |
| get (得てやる) | send (送る) |

| | |
|---------------|------------------|
| give | show (見せる) |
| hand (渡す) | take (持て行く、届ける) |
| leave (残して置く) | teach (教ふ) |
| lend (貸す) | write (手紙を書いてやる) |

之を文例にして見せると、

May I ask you a question? (一つ質問をして宜う御座いますか)

Do me the favour of correcting my composition. (私の作文を直すといふ恩恵を私に賜へ、即ち直して頂きたいものです)

How much did you pay him? (あの人に幾何拂ひましたか)(此 pay といふ動詞の間接目的は him 直接目的は how much である。How much の下には money が略してあると見て「幾何の金を」といふことである)

Show them these pictures.

The other day he wrote us a letter. (先日あの人が吾々へ手紙を寄越しました)

Factitive verb.—また他動詞の中に補辭と目的辭とを要するものがある。例へば

I will make you my secretary. (私はお前を自分の書記にしてやる)

の make といふ動詞は you といふ目的辭を持つて居るから他動詞に違ひないが、併し I will make you だけでは「私はお前を——にしてやる」といふのであるから、何の意味とも分らない、即ち是れだけでは動詞の働が不十分なのである。そこで之に my secretary といふ補辭を加へると初めて意味のある文となる。かくの如く目的辭の外に尙ほ補辭のなくてはならぬ他動詞を *factitive verb* (ファクティヴィヴ ヴァーブ) といふ。Factitive verb は要するに不完全他動詞である。Call, name, elect (選挙す), appoint (任ず) など此類の

動詞である。

Reflexive verb.—他動詞が self, selves の附いた代名詞たとへば himself, themselves などをも目的に持つ時には之を *reflexive verb* (リフレクシヴ ヴァーブ) と稱へる。

General Nogi killed himself. (乃木大將は自己を殺した、即ち自殺した)

They absented themselves from school for three days. (あの人は三日間學校を缺席した)

この killed は himself といふ代名詞を目的辭とし、absented は themselves を目的辭として居るから、共に *reflexive verb* である。而して此の類の目的辭を *reflexive object* といふ。上の文では himself と themselves が即ちそれである。

五十 完全動詞と不完全動詞 — 動詞の中

には自動詞なると他動詞なるとの別なく補辭を要するものと要しないものがある。之は既に補辭の説明をする時に講じて置いた(第二講 第廿七節を見るがよい)。今其一例を挙げると feel といふ詞は「心持がする」といふ意味の語であるから、he feels 或は he felt などといふのみでは無意味である。是非共 feel, felt の下に補辭を要するのである。そこで

He feels sad. (彼は物悲しい心持がする)

He felt ashamed. (彼は耻しく思った)

とすれば意味の有るものとなって来る。かく

の如く補辭の助けを俟って始めて用を爲す動詞を不完全動詞といふ。之に反して補辭の助けを受けなくとも用の足る動詞を完全動詞といふ。

That child can walk. (あの小兒は歩ける)

(Animals) grow and die. (動物は生長して死ぬ)

此の walk, grow, die の如きはこれ丈で意味わかるから完全動詞である。但し完全動詞でも使ひ様によっては不完全動詞になることがある。上の例の grow の如き「生長する」といふ意味でなく「なる」といふ意味に用ひ、又 die を「夭死する」の意味に使ふ時は、下の如く不完全動詞となり随って補辭を要する。

At this word he grow angry. (此の言葉を聞いて彼は怒った)

His eldest son died young. (彼の長男は夭死した)

即ち angry と young が補辭である。Feel の如きも通常は不完全動詞であるけれども、

I felt his pulse. (私は彼の脈を取った)

の felt は pulse といふ目的辭を持つてゐる故他動詞であるけれども、補辭を要しないから、完全動詞である。尚ほ下の例につき完全不完全の區別を考へて見るがよい。

完 全

不 完 全

The cup fell down upon the floor. (コップは床の上に落ちた)

I soon fell a sleep. (私は間もなく寝入った)

Where did you get it? (君はそれを何處で得たか)

I must get it washed. (私はそれを洗つて貰はなければならぬ)

Who made these kites? (誰が此の紙鳶を造ったか)

We made the Russians run in confusion. (吾々は露兵をして潰走せしめた)

英語では完全動詞を complete verb (コンプリート ヴェーブ)、不完全動詞を incomplete verb (インコンプリート ヴェーブ)といふ。

完全動詞と不完全動詞の定義—完全動詞は補辭の助けを要しない動詞、不完全動詞は補辭の助けを要する動詞である。

(規則的、不規則的)

五十一 正則動詞と變則動詞——動詞には根體或は基體と稱すべきものがある。例へば walks, walked, is walking, have walked 等の如く、同じ動詞が色々の形に變つても其の元は walk である。此の元の形を根體或は基體、英語では *verb-root* (ヴァーブルート) といふ。此の根體は過ぎ去つた時の事をあらはすには、之を過去體に改め多くは終りに ed を附ける。

I walked all the way to Tōkyō. (私は東京までの道をスッカリ歩きました)

此の walked は即ち過去體である。然し動詞の中にはかくの如く ed を附けずして他の變化を生ずるものもある。例へば eat が ate に變り、break が broke に變り、feel が felt に變るの類である。

次に動詞が他の動詞例へば have, be などと接續する時には其の根體に變化が起る。例へば

He has just returned home. (彼は今家へ歸つて來た)

Nobunaga was killed by Mitsuhide 信長が光

秀に殺された)

此の returned と killed の如きは、その根體なる return, kill から變形したものである。之を過去分詞即ち *past participle* (パースト パーティシプル) といふ。此の過去分詞にも上の例の如く根體の終りに ed を附けて造られるものと他の方法を以てせられるものがある。Break, broken; eat, eaten; feel, felt の類である。

動詞の根體が過去になり或は過去分詞に變る時に、終りに ed の附くのは之を正則動詞即ち *regular verb* (レギュラー ヴァーブ) といひ、ed が附かずして他の方法で變化するのを變則動詞(又不規則動詞)即ち *irregular verb* (イレギュラー ヴァーブ) といふ。

| 根體 | 過去體 | 過去分詞 |
|------------|--------|--------|
| talk (話す) | talked | talked |
| work (働く) | worked | worked |
| rain (雨降る) | rained | rained |

などは、何れも過去及び過去分詞に於て ed といふ語尾が加はるから正則動詞である。然るに

| 根體 | 過去體 | 過去分詞 |
|-------|-------|--------|
| speak | spoke | spoken |
| make | made | made |
| come | came | come |
| grow | grew | grown |

などは、edを附けずして過去となり過去分詞となるものであるから變則動詞である。〔尚ほ變則動詞の中には、過去でも過去分詞でも根體のまゝで變化しないのがある。〕

| 根體 | 過去體 | 過去分詞 |
|-----|-----|------|
| put | put | put |
| cut | cut | cut |
| set | set | set |

の如きはそれである。

正則動詞と變則動詞の定義—正則動詞はその根體に ed を附けて過去と過去分詞を造ることを得る動詞・變則動詞は此の規則によらずして變化する動詞である。

欠

欠

の三種類があって、過去は根體の終りに ed を附け或は前節に述べた如き他の方法を以って變形せしめたのをいひ、現在は根體の終りに ing を附けたものをいひ、完了は having に過去分詞を添へたものをいふ。

| 過去 | 現在 | 完了 |
|--------|----------|---------------|
| walked | walking | having walked |
| spoken | speaking | having spoken |
| worked | working | having worked |
| read | reading | having read |

分詞は動詞と形容詞との用を兼ねたものである。

A **burning** house (燃えて居る家).

Running stream (流水).

People **living** in cities (都に住む人).

The men **killed** in this battle (此の戦に殺された人)

A house **built** of stone (石で造った家)

是等の分詞は、動詞でありながら皆前或は後の名詞を形容して居るのであるから、形容詞の働

きをも爲して居るのである。唯完了分詞だけは *phrase* の一部分になって時や原因をあらはすことが多い。

He was quite tired, **having walked** all the way from Tōkyō.

といふ完了分詞 *having walked* は「彼が疲れて居た」といふ事の原因を示す句になって居る。即ち *having walked all the way from Tōkyō* は *phrase* である。

His parents **having died**, he went up to Tōkyō to live with his uncle. (兩親がなくなつて了つた時に彼は上京して叔父様と同居した)

此の *his parents having died* といふ句は、*when his parents had died* と同じ意味であつて時をあらはして居る。

不定詞 又は不定法には二種類あつて、一を單不定詞 (*simple infinitive*) といひ、今一つを完了不定詞 (*perfect infinitive*) といふ。單不定詞は動詞の根體の前に *to* を添へたもの、又完了不定詞は *to have* を過去分詞の前に添へたものである。

| 單 | 完了 |
|----------|----------------|
| to walk | to have walked |
| to speak | to have spoken |
| to work | to have worked |
| to read | to have read |

不定法

分詞は動詞でありながら名詞又は形容詞の用を爲すものである。

I don't want to see him. (あの人に逢ひたくない)

To see is to believe. (見るは信ずるなり、人は見てから後に信ずる)

He is said to **have killed** himself. (彼は自殺したといふことだ)

此の第一の *to see* は *don't want* の目的辭、第二の *to see* は動詞 *is* の主辭、*to believe* と第三の *to have killed himself* とは各、補辭である。而して目的辭、主辭、補辭となるのは何れも名詞の本務であるから、此の場合には不定詞が名詞の用を爲して居るものといふことが出来る。又

Water to drink (飲用水)

A house **to let** (貸家)

此の to drink, to let は前の名詞を形容してゐるから形容詞の用を爲すものである。

體詞又體用詞は形に於いては現在分詞及び完了分詞と同一で、これ又單體詞 (*sim'ple ger'und*) と完了體詞 (*per'fect ger'und*) との二種類がある。

體詞は又動詞と名詞の用を兼ねたものである。

I was kept from **going** by the rain. (私は雨に妨げられて行くことが出来なかった)

He denied **having given** us that promise. (彼は吾々にそんな約束をしたことを否定した、約束をしないといった)

此の going は單體詞、having given は完了體詞である。而して是は事をあらはしてゐるから、名詞の用を兼ねたものと見なければならぬ。

以上三種の準動詞の變化を表にあらはすと下の如くなる。

| | | | | | | |
|----|----|-------------|------------|--------------|---------------|---------------|
| 根體 | go | get | take | wish | kill | |
| 分詞 | 現在 | going | getting | taking | wishing | killing |
| | 過去 | gone | got | taken | wished | killed |
| | 完了 | having gone | having got | having taken | having wished | having killed |

| | | | | | | |
|-----|----|--------------|-------------|---------------|----------------|----------------|
| 不定詞 | 單 | to go | to get | to take | to wish | to kill |
| | 完了 | to have gone | to have got | to have taken | to have wished | to have killed |
| 體詞 | 單 | going | getting | taking | wishing | killing |
| | 完了 | having gone | having got | having taken | having wished | having killed |

正動詞と準動詞の定義—正動詞は叙述辭の主語として用ひ得べき動詞である。又準動詞は叙述辭の主語以外の用を爲す動詞である。

練習問題

二 十 一

下の文につき動詞を指示し、且つ其の種類をいへ。

1. I want to see the Principal (校長様).
2. I learned English while I was at Kōbe.
3. Father bought me a new silver watch.
4. This is bread made of rice.
5. I should like to go with you.
6. Study hard while you are young.

7. To-morrow will be my birthday.
8. Is it the cap your uncle gave you as a New-year's gift?
9. You can see it more clearly when it is fine weather.
10. Having completed the middle-school course, he came up to Tōkyō.
(中學の課程を終ってから、彼は東京へ来た)
11. The statue standing in the park is to his memory.
(公園内の銅像は即ちあの人の紀念の爲めです)
12. He is said to have gone abroad.
(彼は外國へ行ったといふことです)
13. I am fond of playing chess.
(将棋をさすことが好きです)
14. English is the language used in England and America.

15. He was wounded on the field and died a few days afterwards.
(彼は戦場で負傷して後間もなく亡くなった)
16. Do you sometimes drink beer?
17. We had to wade the stream.
(吾々は河を徒渉しなければならなかった)
18. What do you think this mark means?
(此のしるしは何ういふ意味だか知って居ますか)
19. Do you hear the bird singing in the bamboo jungle?
(竹藪の中に囀って居る鳥の聲が聞えるか)
20. He became greedier as he grew older.
(年をとるに連れて慾が深くなった)

五、副詞

五十三 副詞の分類——副詞は通常下の四種類に分けられる。

(一) 單副詞即ち *simple ad'verb* (シンプル
ア_ドヴァ_ーブ)

(二) 疑問副詞即ち *in'terrog'ative ad'verb* (イ
ンタロガトイヴ ア_ドヴァ_ーブ)

(三) 關係副詞即ち *rel'ative ad'verb* (レラトイ
ヴ ア_ドヴァ_ーブ)

(四) 様副詞即ち *mo'dal ad'verb* (モ - ダル
ア_ドヴァ_ーブ)

但し此の分け方は使ひ方の上から立てた分類
である。之を意味の方から分けると下の五種
類となる。

(一) 方法様式の副詞即ち *ad'verb of manner*.
例—Well (よく、十分に), bravely (勇ましく),
slowly (徐々に), hard (劇しく), tenderly (やさし
く), fast (速く), gladly (喜んで).

(二) 時の副詞即ち *ad'verb of time*. 例—When?
(何時), then (その時に), early (早く), later (後に),
soon (間もなく).

(三) 場所の副詞即ち *ad'verb of place*. 例—
There (其處に), where (何處に), above (上に),

backward (後方へ), down (下へ).

(四) 程度の副詞即ち *ad'verb of degree*. 例—
Very, quite, little, somewhat (やゝ、少々), rather
(むしろ、どちらかといへば).

(五) 應答の副詞即ち *responsive*. 例—Yes, no,
ay (左様左様).

五十四^イ 單副詞——普通の副詞は皆單副詞で
ある。詳しくいへば疑問・接續用の副詞を除い
た外は皆單副詞即ち *simple adverb* (シンプル ア_ド
ヴァ_ーブ) である。

He speaks very slowly.

I have seldom seen a foreigner. (私は今までメッ
々に外國人を見かけません)

Have you been there often? (君はあすこへ時
々行ったのか) ^{not been}

I generally rise earlier than my brother. (私は
大概兄より早く起きます)

I never thought you would come back so soon.
(私は君がそんなに早く歸らうとは少しも

考へなかつた)

以上五文の中、very, slowly, seldom, there, often, generally, earlier, never, back, so, soon は、何れも疑問用でもなく接續用でもなく、唯だ動詞や形容詞や他の副詞を形容するのみの用を爲すものであるから、皆單副詞である。副詞の十中の八九は此の類に屬する。

單副詞の定義—單副詞は唯だ動詞・形容詞及び他の副詞を形容するのみの副詞である。

五十五 ^し疑問副詞—疑問副詞即ち *in'terrog'ative ad'verb* (インタロガトイヴ アドヴァーブ) は when? (いつ), where? (どこ), how? (どうして、いかばかり), why? (なぜ) 等の如く問をかけるに使ふ副詞である。その中 how? は他の形容詞に附屬して數や量や程度を問ふに使ひ、又感嘆に用ひる。

How many pens do you want? (ペンが幾本欲しいか) (數)

How much paper do you want? (量)

How long shall you stay there? (あの地には幾日御逗留ですか) (程度)

How well Tom writes! (感嘆)

疑問副詞の定義—疑問副詞は問をかけるに使ふ副詞である。

疑問代名詞と疑問副詞は共に問をかけるに使ふ詞であるから初學の人はその區別をし兼ねることがあるが、疑問代名詞は「誰」「何」の如く人或は物を指して問ふに使ひ、疑問副詞は「何時」「何處」「何故」「何うして」「何の位」「何方へ」「何方から」の如く時・場所・理由・仕方・程度・方向等を問ふに使ふのであるから、指す處を考へさへすれば直に差別がつくのである。

五十六 ³關係副詞—*Clause* と *clause* を結び合せる副詞を關係副詞即ち *rel'ative ad'verb* (レラトイヴ アドヴァーブ) 又は接續副詞即ち *conjunc'tive ad'verb* (コンヂャンクトイヴ アドヴァーブ) といふ。今こゝに this is the house といふ *clause* と he used to live there (彼が其處に住み慣れた) といふ *clause* があるとして、之を一つに合せるには如何にし

たらよいかといふに、關係代名詞を以つてするか關係副詞を以つてすればよいのである。

This is the house $\left\{ \begin{array}{l} \text{in which} \\ \text{where} \end{array} \right\}$ he used to live. (これは

は彼が住み慣れた家です)

即ち which は關係代名詞、where は關係副詞である。

疑問副詞は疑問に使はなければ關係副詞になる。例へば

Why did you smile at him? (何故お前はあの人を笑つたか)

の why は疑問副詞であるが、

That is **why** I smiled. (それが即ち私の笑つた譯です)

といへば、why は that is と I smiled との二つの clauses を結び合せて居るから關係副詞となる。

尚ほ下の比較を見るがよい。

疑 問

Where were you yesterday? (君は昨日何處へ行つたか)

關 係

A stone stands **where** he was interred. (彼の埋葬された處に石が一つ立って居る)

How did he do it? (彼はそれを何うしてしたか) That is **how** he did it. (彼がそれをした仕方は即ちそれです)

When did he come? (彼は何時來ましたか) My father was out **when** I came home from school. (私が學校から歸つた時に父は外出して居ました)

關係副詞の中には、關係代名詞の如く先現辭 (antecedent) を附けることが出来るのと、之を要しないのとがある。又 where, how, why の如きは先現辭が有つても無くてもよいのである。

A stone stands *where* he was interred. (先現辭なし)

This is the **place** *where* he was interred. (place が先現辭である)

That is *why* I smiled. (先現辭なし)

That is the **reason** *why* I refused. (reason が先現辭である)

He came **while** I was out. (私の外出中に彼が來た) (先現辭を要せず)

関係副詞の定義—関係副詞即ち接 續副詞は *clause* を他の *clause* に結び合 せる副詞である。

関係代名詞と関係副詞—関係代名詞と関係副詞との
區別も初學者には分りにくいから一言説明して置く。
関係代名詞は人或は物の名の代りに使ふのであるが、
関係副詞は人や物を指さずして時・場所・仕方・理由をあらは
す。故に who, which, what は関係代名詞であつて、when, while,
where, how, why は関係副詞である。然しながら *clause* と
clause を結び合せるといふ點については此の二種類は差
別がない。

接續用の疑問副詞と関係副詞—疑問副詞は疑問の
clause を他の *clause* に結び附ける爲めに用ひられること
がある。例へば you smiled といふ *clause* を tell me といふ *clause*
に結び合せる爲めに why を使って

Tell me **why** you smiled. (何故君は笑つたのか聞かせ給
へ)

とあれば、you smiled は「笑つたか」といふ意味であるから疑
問の句である。その疑問の句を tell me といふ *clause* に結
び附けるのは即ち why である。若し此の why がなかった
ならば全文の意味がわからなくなる。然るに前にも例
に挙げた如く

That is **why** I smiled.

とすれば、全文の意味は「それが私の笑つた譯だ」といふ
義になつて「何故笑つたかである」といふ意味ではない。
即ち此の why は疑問語ではなくして接續詞である。か
くの如く同一の詞が疑問語として接續に用ひられ或は
單純なる接續詞として用ひられる事は注意を要する。
尙ほ下の例について見るがよい。

疑 問

I don't remember **when** I saw
him last. (此の前は何時會つたか
覺えがない)

Ask him **how** he did it. (それ
を何ういふ風にしたのかあの人
に聞いて見よ)

I don't know **where** he lives.
(彼が何處に住んでるか知りませ
ん)

關 係

I saw him the day (**when**) I left
Kyōto. (私は京都を立つ日にあ
の人に會ひました)

I saw him **when** I was about to
leave Kyōto. (京都を立たうとい
ふ時にあの人に會つた)

That is **how** he did it.

Nothing was to be seen **where**
he had left his horse. (先に馬を残
して行つた場所には何もなかつた)

五十七 様副詞—副詞の中に、疑問に使ふの
でもなく、*clauses* の繋ぎ合せに使ふのでもなく、
又單副詞の如く一二の詞を形容するのでもな
く、文全體の意味を變化せしめる類のものがある。
例へば

Perhaps they are out. (たぶんあの人達は外
出して居るでせう)

といふ場合に於て、「多分—だらう」といふ意味
の perhaps といふ詞は、決して out だけを形容す
るのでも are だけを形容するのでもなく、主辭た
る they を形容するのでもなく、全文があらはす

所の意味を變化せしめて

It may be that they are out.

と同じ意味をあらはして居るのである。かくの如く文の全部を形容する副詞を様副詞即ち *modal adverb* (モーダル アドヴァーブ) といふ。Indeed, truly, surely, undoubtedly, certainly, probably (多分), not, neither 等の如きは皆此の類に屬する。

Surely he will succeed. (あの人は屹度成功する)

This is **decidedly** the best of all. (これは皆の中で確に一番よい)

Evidently he was mistaken. (まさしくあの人は誤解をして居たのだ)

此の surely, decidedly, evidently は何れも全文の意味を強めて之を形容して居る。

應答に使ふ yes, no の如き副詞も様副詞の一種と認めてある。

様副詞の定義—様副詞は文全部を形容する副詞である。

練習問題

二十二

下の文につき副詞を指示し、且つ其の種類をいへ。

1. Where did you find them?
2. I don't know how he made it.
3. It is quite impossible to do it so soon.
4. He is far away from home.
5. This is why I agreed with him.
(あの人に同意した譯)
6. He can run much faster than I.
7. He is decidedly the best pupil in our class.
8. He will surely succeed, for he works so hard.
9. Satō speaks English very well.
10. Is he coming to-morrow?
11. I got home much later than usual.
(いつもより餘程遅く家に着きました)
12. This is how I understand loyalty.
(私が忠義といふ事を解して居るのは此の如くです)

13. When shall you arrive at Berlin?
(あなたは何時伯林にお着きになるのですか)
14. Never tell a lie; always speak the truth.
15. That book was published ten years ago.
16. The rich are not always happy.
17. I planted it when I was about seven years old.
18. "Do you often see him at school." "No, very seldom."
19. How pretty these flowers are!
20. Will he come here to-day?

六、接 續 詞

五十八 接續詞の分類——接續詞は下の二種類に分たれる。

- (一) 同位接續詞即ち *co-or'dinate conjunction*
(コオ-ドィネ-ト コンヂャンクジュン)
- (二) 従位接續詞即ち *subor'dinate conjunction*
(サブオ-ドィネ-ト コンヂャンクジュン)

五十九 同位接續詞と従位接續詞——*Clauses* を二つ或は三つ四つも並べて一の文にすると、其の中の一つなり二つなりが主なるものとなり、他のものが従になることがある場合と、*clauses* が皆同等の位に立つ場合とある。例へば his father is a soldier と his brother is an artist といふ二つの *clauses* を合せて一つの文にするに當り、while といふ接續詞を使って、

His father is a soldier, **while** his brother is an artist.

(あの人の兄は美術家だが父は軍人である)
といへば、其の前の *clause* 即ち his father is a soldier は主位に立ち his brother is an artist は従位に立つこととなる。語を換へて言へば his father is a soldier の方は his brother is an artist よりも大切な位置を占める。然るに此の while の代りに and か but を用ひて、

His father is a soldier **and** his brother (is) an artist.

(あの人の父は軍人でまた兄は美術家だ)

His father is a soldier, **but** his brother is an artist.

(あの人の父は軍人だが然し兄は美術家だ)

といへば、前後の二つの *clauses* はどちらが重い軽いといふ區別がなくなつて同等の位に就くのである。

As Tom was ill, I came without him. (トムは病氣だから私は同伴せずして來ました)

Tom was ill, so I came without him. (トムは病氣でありました、ですから私は同伴せずして參りました)

この二文に於ても前の方の *as* の附いた方が從で I came without him が主であるが、次ぎの方の文では Tom was ill も I came without him も別に輕重の差別がない故、之を同等の位に立つものとせねばならん。かくの如く *clauses* が一つの文の中に並んでそれに輕重の差がない時には之を同位句即ち *co-or'dinate clauses* といひ、一方が一方より輕いか重いかする時には、重い方を主位句即ち *prin'cipal clause* (プリンシパル クロウズ) 輕い方を從位句即ち *depen'dent* (ドイペンデント)、又 *subor'dinate clause* といふ。接續詞を用ひて二つ或は二つ以上の *clauses* を繋ぎ合せる場合には、同位句

を結合せるものは同位接續詞即ち *co-or'dinate conjunc'tion* であつて、主位句と從位句を結合せるものは *subor'dinate conjunc'tion* である。上の例に就いて言へば *and* や *but* や *so* は同位接續詞であつて、*while* や *as* は從位接續詞である。

同位接續詞はまた詞と詞・*phrase* と *phrase* を結合せて同等の位置に立たせる。

He and I are great friends. (あの人と私とは格別の親友です)

この *he* と *I* は共に *are* の主辭であつて輕重の差がない。この同等の二詞を結合せて居るのは即ち *and* である。

Animals grow and die. (動物は成長して後死ぬ)

この *grow* と *die* は共に *animal* に對する敘述辭である。この敘述辭を繋ぎ合せて同等の位置に立たせるものは即ち *and* である。

Is it on the shelf or in the drawer? (棚の上にあるか或は抽出の中にあるか)

Come in the morning and in the evening. (午前

と晩にお出で)

此 or と and も同等の位置に立つべき二つの phrases を結合せて居る。

* 従位の clause を主位の clause に繋ぎ合せるものは必ずしも従位接続詞のみではない、関係副詞も接続用の疑問副詞も関係代名詞も接続用の疑問代名詞も同様の用をなす。併し同位の clauses を繋ぎ合せるものは同位接続詞に限る。

He came **while** I was out. (あの人は私の外出中に来た) この while は関係副詞である。

Tell me **how** it came about. (私にどうしてそれが出来て来たのか話して呉れ) この how は疑問副詞である。

I want a young man **who** speaks English. (英語を話す青年が一人欲しい) この who は関係代名詞である。

Tell me **who** wrote this. (誰が之を書いたのか教へて下さい) この who は疑問代名詞を接続用にしたものである。

同位接続詞の重なるものは下の如し。

and but however yet so
therefore or nor both—and either—or
neither—nor whether—or

この中 either—or の如く二詞から出来て居るのは接続せしめられる詞句の前と中間に配りつけるのである。

Either he or you are to blame. (あの人が君かどちらか非難すべきである、即ち悪いのだ)

He comes **both on Sunday and (on) Tuesday**. (あの人は日曜日と火曜日の両日共に来る)

従位接続詞の重なるものは下の如し。

if although for since than
unless lest because while though
that as as if as though so that

同位接続詞と従位接続詞の定義一

同位接続詞は同等の位に立つ詞と詞・句と句を結合せる接続詞である。又従位接続詞は主位の clause に従位の clause を結合せる接続詞である。

従位接続詞 as (故に), while (然るに一方に於ては), since (故に)等は、爰に記す様な意味に使へば勿論接続詞であるが、之を時をあらはす接合辭に用ひて as he rode along (馬を進むる途すがら), while I was out (僕の外出中に), since he came (彼の来て以來)などいふ時は、三詞ともに接続副詞に

なるのである。

練習問題

二十三

下の文につき接続詞と其の接続する詞或は句を指示し、且つ其の種類をいへ。

1. I can't tell whether Satō is her brother or uncle.
（兄と叔父）
2. A is equal to B; therefore, B is equal to C.
3. Tom works hard so that he may succeed.
4. I wan't do so unless he agrees.
（除非）
5. He was taken ill, so he gave up the plan.
（彼は病みついただから其の計畫をやめた）
6. His horse is neither black nor white.
7. He is poor; yet he is honest and works very hard.
8. He is honest and hard-working, though he is poor.
9. He has much more than you or I.

10. I think that he will come to-morrow or the day after (to-morrow).
（翌日）
11. That is blue, while this is green.
12. I like him, for he is very kind and gentle.
（故に）
13. He is tall for his age, but I think he is a little shorter than you.
（就）
14. Let me see both the book and the picture.
（両方）

前置詞と間投詞には種類の別ちがないから本講には之を説かない。

第 四 講

一、詞の文法變化

六十 文法變化——詞といふものは一種の生きものである、使い様によって色々に變化する。例へば

He is very tall for his age. (あれは年の割合に身長が高い)

といふ文を、指す人を二人か三人にし、それを昔の話にし、「身長が高い」といふのを誰かに比べて高いといふ意味にすると、he が they, is が were, tall が taller となる

They were taller than you or I. (あの人たちは君や僕より身長が高かった)

となる。但しこの例は詞の形に變化を生ずることを示したものであるが、然らば此變化といふことは何時でも詞形の變化を指すのかといふと、決してそうでない。詞の形體は使い様によって必ず變化するとは謂へない。たとへば

her といふ代名詞は、名詞の前に配って物の持主をあらはす場合にも、又目的辭となる場合にも、同じく her で通用する。

This is her parasol. (これはあの女の日傘だ)

I did not see her. (あの女に遇はなかった)

又 are といふ動詞は、we といふ主辭に對する叙述辭に使つても、they や you に對する叙述辭に用ひても、矢張り are である。即ち

We are to go together. (吾々は同行することになつて居る)

You are to go with us. (君は吾々と同行することになつて居る)

They are to go by themselves. (あの人たちはあの人たちだけで行くことになつて居る)

かくの如く使ひ方によって形を變じないこともある、然も其の使ひ様によって他詞との關係や指し所の性質が變ることは定まつて居る。たとへば he が them に變れば其の指し所が二人か二人以上になり、動作をなす人ではなくして之を受る人となり、隨つて主辭が目的辭になつて動

詞に對する關係が變化する。前に擧げた文例中の her の如きも一は名詞 parasol の持主をあらはし、一は see といふ働を受けることをあらはすといふ變化が起る。

文法で上に述べた如き變化を文法變化即ち *modi'fica'tion* (モディフィケーション) といふ。

これより序を逐って諸詞の文法變化を講じよう。

二、名詞の變化

六十一 人稱——さきに第三講第三十七節に於て人稱代名詞の説明をなすに當り、人稱といふはどんなものかといふことを述べて置いた。而して人稱といふものは單だ代名詞にあるのみでなく、名詞にもあるべきものである。即ち名詞が話をする人自身を指せば第一人稱、話の相手を指せば第二人稱、その外の人或は物を指せば第三人稱だといふ。

We, **students** should bear it in mind. (吾々學生はそれを心に記して忘れてはならない)

この **students** といふ名詞は話し手自からを指して居る詞であるから第一人稱である。

This is what you, **students** should bear in mind.
(これは君達學生の心に記して忘るべからざることである)

此の **students** は話相手即ち話を聽いて居る人を指すのであるから第二人稱である。次に

They are **students** of a high-school. (あれは皆高等學校の學生だ)

といへば、**students** は話をする人でもなく話相手たる人でもないから第三人稱である。かくの如くその人が話手であるか或は話相手であるか但しは又噂の者即ち話の種であるかによつて生ずる文法變化を人稱即ち *per'son* (プーソン) といふ。

人稱には前に述べた通り第一第二第三の三種類があるが名詞は大概第三人稱であつて、第一人稱たることは極めて少く、第二人稱も比較的少い。何故なれば名詞は話の種に使はれることが多いからである。但し人の名を呼びか

ける場合は必ず第二人称である。

Well, my **friend**, do you live far from here? (サテ君、君は此處から遠くに住んでゐるのか)

Halloo! What are you about, **Satō**? (オイ佐藤、何をして居る)

此の friend と佐藤は呼び掛けるに使った名詞であるから共に第二人称である。

人称の定義—人称は名詞のあらはして居る人が話手であるか話の聴手であるか或は話の題目となるかによって生ずる名詞の文法變化である。

名詞は人称の爲めに形を變ずることがない。

練習問題

二十四

下の文につき名詞を指示し、その人称をいへ。

1. Boys, have you all brought your compositions?
2. We, schoolboys care little about such trifles.

(吾々學校生徒は其のやうな些細な事を餘り氣に止めません)

3. Jimmū was the first Emperor of Japan.
4. Is this your cap, John?

六十二 數—名詞が一個の物を指す時にはそれを單數といひ、二個或は二個以上の物を指す時には之を複數といふ。此の差別を指す變化が數即ち *num'ber* (ナムブ) である。單數は英語で *sin'gular num'ber* (シンギュラー ナムブ) といひ、複數を *plu'ral num'ber* (プリーラル ナムブ) といふ。

Give me three pens and a bottle of ink.

といへば pens は三個のペンを指して居るから複數、a bottle と ink は一つを指して居るから單數である。

眞の抽象名詞と物質名詞には複數といふことがない。何時でも單數である。

數の定義—數は名詞の指す物の數が一つであるか或は二つ若くば二

つ以上であるかを示す文法變化である。

名詞が單數から複數に變る時は通常終りに s を付ける。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|------|-------|-------|--------|
| boy | boys | horse | horses |
| girl | girls | tree | trees |

名詞が單數である時に終りに s, ss, sh, ch (チと響く ch に限る) 又は z が附いてゐるものは複數になる時に es を付ける。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|-------------|------------------|------------|-----------------|
| gas (氣體) | gases (數種の氣體) | peach (桃) | peaches |
| glass (コップ) | glasses (數個のコップ) | topaz (黄玉) | topazes (數個の黄玉) |
| fish | fishes (數種の魚) | | |

單數の時に終りに o のある名詞の中にも同じく es を付けるものがある。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|--------------|--------|--------------|----------|
| hero (英雄、勇士) | heroes | potato (馬鈴薯) | potatoes |

但し io, oo の時は s のみを付ける。例へば curio (骨董), curios; cuckoo (郭公), cackoos の如きものである。又 mosquito (蚊), mosquitos; solo (獨奏), solos の

如きも例外である。

單數の時に終りに y があってその前に父音のある名詞は、その y を i に變へて下に es を加へる。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|---------|--------|----------|-------|
| fly (蠅) | flies | cry (叫び) | cries |
| lady | ladies | spy (間諜) | spies |

boy, key の如き y の前に母音のあるものは s のみを付けて複數を作る。

終りに f か fe のある名詞は複數になると f が v に變りその後 es が附く。但し之には例外もある。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|-----------|---------|-------|---------|
| leaf (葉) | leaves | thief | thieves |
| wife | wives | knife | knives |
| shelf (棚) | shelves | | |

Chief (長、頭), chiefs; roof (屋根), roofs; handkerchief, handkerchiefs 等は例外の方である。

或る名詞は複數になると終りに en が附く。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|--------------|----------|-------|----------|
| ox (牡牛) | oxen | child | children |
| brother (同胞) | brethren | | |

母音を變更して複數を作るものもある。

| 單數 | 複數 | 單數 | 複數 |
|-------|-------|-------|-------|
| foot | feet | woman | women |
| goose | geese | mouse | mice |
| man | men | | |

sheep (羊), deer (鹿), swine (豚), cod (鱈), salmon (鮭), trout (鱒), carp (鯉)等は單數複數共に同形である。

或る名詞は必ず終りにsが附いて居る。Thanks (感謝), billiards (玉突), clothes (衣服), measles (はしか), environs (郊外), oats (燕麥), remains (死骸)等の如きはそれである。此の外に二部分から出来て居る物品例へば drawers (ツボン下), trousers (ツボン), bellows (ふいご), compasses (コンパス), scissors (鋏), spectacles (眼鏡)等も此の類に屬する。

練習問題

二十五

一、下の單數名詞を複數に改めよ。

Book, man, brother, handkerchief, glass, solo, lady, tooth, child, baby, knife, lamp, American,

roof, deer, mouse.

二、下の複數名詞を單數に改めよ。

Maid-servants, schoolboys, countries, mosquitos, lives, oxen, cod, brethren, feet, spies, keys, potatoes.

六十三 性——人や動物には男女・雌雄の別がある。その區別をあらはす文法變化を性即ち *gen'der* (ジェンドァ)といふ。性には男性・女性・中性の三種類がある。男或は雄性の物の名稱は男性即ち *mas'culine gen'der* (マスキュリン ジェンドァ)といひ、女又は雌性の物の名稱を女性即ち *fem'inine gen'der* (フェミニン ジェンドァ)といひ、性のないもの即ち雄でも雌でもないものゝ名は中性即ち *neu'ter gen'der* (ニューター ジェンドァ)といふ。Man, boy, father, king, actor (俳優), count (伯爵)は男性、woman, girl, mother, queen, act'ress (女優), countess (伯爵夫人)は女性である。又 tree, stone, house, lamp, head, smoke等は中性である。

男女雌雄兩性の何方にも通用する名詞は通性即ち *com'mon gender* (コムモン ジェンドァ)とい

ふ。Friend, child, customer (買物客)等はそれである。

性の定義—性は名詞の指すものが雄性か雌性か或は無性かを明にする文法變化である。

女性を作るに男性の終りに -ess, -ine などを加へる名詞がある。

| 男性 | 女性 |
|--------------|----------------|
| actor | actress |
| count | countess |
| emperor (皇帝) | empress (皇后) |
| god | goddess |
| master (主人) | mistress (女主人) |
| poet | poetess |
| tiger (虎) | tigress |
| hero (主人公) | heroine (女主人公) |
| Joseph (人名) | Josephine |

通性名詞の前或は後に男女性を明にする詞を加へて男性と女性を作ることがある。例へば servant は男女の召使に通ずる名稱であるが、之に man と woman とを添へて下男と下女の區別を立てるの類である。

男性
 man-servant
 he-cat
 bull-calf (牡の子牛)
 dog-fox (牡狐)
 pea-cock (牡の孔雀)

女性
 woman-servant
 she-cat
 cow-calf (牝の子牛)
 bitch-fox (牝狐)
 pea-hen (牝の孔雀)

又男女兩性に全く違った詞を使用することがある。

男性
 bachelor (獨身の男)
 boy
 bull (牡牛)
 cock (牡鶏)
 brother
 horse
 husband (夫)
 king
 lord (卿、殿様)
 gentleman (紳士)
 man
 nephew (甥)
 father
 gander (牡の鵞鳥)
 sir (旦那様)
 son

女性
 { maid (獨身の女)
 { spinster (同)
 girl
 cow (牝牛)
 hen (牝鶏)
 sister
 mare (牝馬)
 wife
 queen
 lady (貴婦人)
 lady
 woman
 niece (姪女)
 mother
 goose (牝の鵞鳥)
 madam (奥様)
 daughter

uncle

aunt

練習問題

二十六

一、下に挙ぐる名詞の性をいへ。

Man-singer, negress (女の黒奴), mother, cock, mare, hen, aunt, sir, empress, she-cat, tigress, actor, teacher, class, dog, friend, water.

二、下に挙ぐる男性名詞を女性に改め、女性名詞を男性に改めよ。

Girl, uncle, she-devil (女悪魔), god, poet, gander, daughter, Pauline (人名), sister, cock, lord, niece.

4、六十四格——文の中に使つてある名詞と他の詞との関係によって生ずる變化を格即ち case (ケース)といふ。例へば

Napoleon was a great man. (ナポレオンは偉

人であった)

といふ文に於て Napoleon は主辭であつて動詞 was に對用せられて居る、故に之を文の主辭と

もいひ、又動詞の主辭ともいふ。又

Wellington defeated Napoleon. (エリントンが
ナポレオンを破つた)

といふ文に於ては Napoleon は此文の目的辭だともいひ、又動詞 defeated の目的辭ともいへる。

また

Napoleon's army was defeated by Wellington at Waterloo. (ナポレオンの軍はエリントンに
ワトールで破られた)

といふ文に於ては Napoleon's は army といふものゝ持主即ち所有主をあらはして居るから、之を文法上で物主辭といふ。英語では *posses'sive* (ポゼスィヴ)といふ。かくの如く名詞が主辭となり目的辭となり或は物主辭となるのはツマリ他の詞との関係から生ずることであつて、一種の文法變化に外ならぬ。而して名詞が主辭に使はれると主格即ち *nom'inative case* (ノミナトィヴ ケース)といひ、目的辭に使はれると目的格即ち *objec'tive case* (オブヂェクトィヴ ケース)といひ、また物主辭に使はれると物主格又所有格即ち

posses'sive case (ポセッシヴ ケース)となるのである。

Man alone can speak. (人ばかりが物を言ふ)

Who or what made man? (誰がまた何が人間を造ったのか)

It concerns a man's life. (それは人一人の命にかゝる事だ)

この第一の man は主格、第二の man は目的格、第三の man's は物主格又所有格である。

以上述べる所によって見ると名詞の格を見定めるには他の詞との関係によってしなければならぬ譯である。即ち動詞の主辭であれば主格、その目的辭であれば目的格、また他の物の所有主たることをあらはして居る時には物主格と判定すべきである。併し夫れよりもまだ簡易な判定法がある。即文を譯して見て「——が」「——は」といふ時には主格、「——を」「——に」といふ時は目的格、また「——の」といふ時は物主格ときめるのである。上の例に就いていふならば、第一の man は「人ばかりが」といふのだから

主格、次の man は「人を」といふのだから目的格、第三の man's は「人の」といふのだから物主格といふことになる。但し是れは如何なる場合にも使つて確かなものとはいへない。

格の定義—格は名詞(又は名詞の代用語)と同文の中にある他の語との関係によって生ずる文法變化をいふ。

主格・目的格・物主格—名詞(又は名詞の代用語)が動詞の主辭である時には主格、動詞の目的である時には目的格、物の持主或は所屬をあらはす時には物主格(又所有格)である。

補辭の格—補辭は何格であるかといふにこれは場合によって違ふことになつて居る。即ち補辭が主辭に關するものである時には(之を主格補辭 *subjective complement* といふ)主格になり、目的辭に關する場合には目的格 *objective complement* になるのである。例へば上に擧げた

Napoleon was a great man.

の場合に於ては man は誰の事をいふのかと問ふと、主辭たる Napoleon の事をいふのである故主格補辭であつて、隨つて主格である。然るに

I think him a great man. (私はあの人を偉人だと思ふ) の man は誰の事であるかといふと、これは主辭 I の事ではなく目的辭 him の事をいふのであるから、目的補辭であつて、隨つて目的格である。故に補辭の格を見定めるには、夫れが主辭の事をいつて居るのか、或は目的辭にかゝるのかといふ事をたしかめて、然る後に之を主格とし或は目的格とするのである。

前置詞の目的——前置詞は名詞或は名詞の代用語の前に置くべきものであるが、かくの如く前置詞の後に従ふ名詞或は名詞の代用語を矢張り目的辭といふ。

Will you go with Jim? (君はヂムと一緒に行くつもりか)

With whom will you go? (君は誰と一緒に行くつもりか)

此二文の with は Jim と whom (代名詞) の前に置かれて居るから、Jim と whom はその目的である。かくの如き前置詞の目的辭たる詞は何格であるかといふに是れは勿論目的格である。上の文の名詞 Jim も代名詞 whom も目的格である。

説明辭の格——名詞が他の句詞と並んで夫れを説明して、どんな物であるか、どんな人であるかといふことを明かにする場合に、その説明する方の詞を説明辭即 appositive (アポズィティヴ) といふ。

Milton the poet was blind. (詩人ミルトンは盲目であつた)

此文の poet といふ名詞は他の名詞 Milton の如何なる人であるかを説明して居るから説明辭である。

I saw your friend Kato on my way here yesterday. (僕は昨日此處へ來る途で君の友人の加藤に出逢つたよ) この friend も加藤のどんな人かといふことを明かにして居るから説明辭である。此説明辭といふものゝ格は何

であるかと問へば、これは其の係る所によつて違ふのである。即ち上の第一の場合に於て poet は Milton に係る説明辭である、而して Milton は主辭である。主辭の説明語は矢張り主格である。故に poet も主格である。第二の例の friend は Kato を説明して居る、而して Kato は目的辭である。目的辭の説明辭は矢張り目的格である。故に friend は目的格である。

呼びかけの名詞——神・人・動物等と呼ばけるに使ふ名詞たとへば

Halloo, John! what are you about? (オーイ、ジョンさん、何をして居るのだい)

That is not what I mean, my friend. (私のいふことはそういふ意味ではないよ、君)

の John, friend の如きは之を *nominative of address* (ノミナティヴ オヴ アドレス) といふ、呼びかけの主辭といふことである。又或人は *nominative independent* (ノミナティヴ インディペンデント) (獨立主辭) と稱へて居る。此獨立主辭は如何なる場合にも主格である。

六十五 物主格の形式——格は物主格の場合の外一切名詞の形狀に變化を及ぼさない。故に主格と目的格とは何時でも同じ形である。獨り物主格の時には單數ならば詞の終りに (') (apostrophe アポストロフィー) と s とが附く。

The boy's cap. Napoleon's army.

の如してである。複數の時には複數の主格の終りに (') のみをつける。但し複數の語尾に s のな

い詞には 's を附ける。

The **boys'** cap. **Children's** toys.

の如してある。

此物主格といふは神・佛・人・動物に限って使ひ得らるゝものである、随つて The **tree's** branches (樹の枝)、That **book's** weight (あの本の重さ)といふが如き句は決してない。然し the **sun's** rays (日光)、three **days'** journey (三日の旅程)、a **stone's** throw (石を投げてとゞく位の距離)といふ如き特殊の例外がある。詳しくは英文法邦語新講義を見よ。

練習問題

二十七

一、下の文につき名詞を指示し、且其の格をいへ。

1. Who was Napoleon?
2. Where did you get these persimmons, Tom?
3. I got them from the big tree by the barn.
4. I bought an English book at Shokwabō's (store).

5. Satō's father is much older than yours.
6. His brother, Yoshitsune exterminated the Heishi in the West.
(その弟の義経が平氏を西國で殲滅した)
7. Do you know my friend, Jim Smith?
8. I think it Tom that wrote these poems.
9. Afterward he became a merchant, and moved to Kōbe.
10. This tree blossoms in June.
11. These are students' caps.

二、下の文につき名詞を指示し、且其の(一)人稱(二)數(三)性(四)格をいへ。

1. To-morrow will be my birthday.
2. Are you going to Mr. Sakai's (house) this afternoon?
3. Can a beast speak as man does?
4. This is not an umbrella, but a lady's parasol.
5. The carpenter builds houses, and does not make furniture.
6. How did you know it was a policeman, my

friend?

7. Which do you like better, a pear or an apple?

8. The electric lamp is much brighter than a common oil-lamp.

(電燈は普通の油燈より餘程明るい)

9. He is a captain, and commander of our company.

10. Necessity is the mother of invention.

(必要は發明の母なり)

11. Queen Victoria was mother of King Edward.

12. Did you see my cousin Jim at the meeting?

13. Most birds build their nests in a tree or a bush.

14. We young pupils are all very fond of it.

(吾々少年生徒は大變にそれを好みます)

15. I will be a soldier when I am a man.

(私は大人になったら軍人になるつもりだ)

三、代名詞の變化

六十六 代名詞の人稱・數・性・格——代名詞にも名詞と同様に人稱・數・性・格の四變化がある。

而して人稱代名詞は此四種の變化の爲めに大抵詞形が變るのである。まづ人稱代名詞に就いて變化を示さう。

第一人称

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|-------------------|-----------|--------------|
| 單數 | { 男性 } I (私は、が) | my (私の) | me (私を、に、と) |
| | { 女性 } | | |
| 複數 | { 男性 } we (吾々は、が) | our (吾々の) | us (吾々を、に、と) |
| | { 女性 } | | |

第二人称

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|--------------------|------------|---------------|
| 單數 | { 男性 } you (君は、が) | your (君の) | you (君を、に、と) |
| | { 女性 } | | |
| 複數 | { 男性 } you (君等は、が) | your (君等の) | you (君等を、に、と) |
| | { 女性 } | | |

第三人称

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|---------------------|-------------|----------------|
| 單數 | { 男性 } he (彼は、が) | his (彼の) | him (彼を、に、と) |
| | { 女性 } she (彼女は、が) | her (彼女の) | her (彼女を、に、と) |
| | { 中性 } it (それは、が) | its (その) | it (それを、に、と) |
| 複數 | { 男性 } they (彼等は、が) | their (彼等の) | them (彼等を、に、と) |
| | { 女性 } | | |

此表に見ゆる通り第二人称には單數・複數の形體上の差別がない。又第一・二人稱とも男性女性の形體上の差別がない。

人稱代名詞の物主格は名詞の前に使ふ場合とその名詞を略す場合と形體をかへなければならぬ。即ち名詞のある場合には上の表に見ゆる如く my, our, your, his, her, its, their を使ふのであるが、名詞を略して書きあらはさない時には

| | 單數 | 複數 |
|------|-------------------------|--------|
| 第一人稱 | mine | ours |
| 第二人稱 | yours | yours |
| 第三人稱 | 男 his 女 hers 中 ナシ | theirs |

にする。例へば

This book is **mine**, and not **yours**. (この本は私のです、君ののではない)

What has become of **hers**? (あの女のはどうなったのですか) の如くなる。

人稱代名詞の一種に、働を他物に加へずして自己に加へることをあらはすに用ひるのがある。例へば

They killed **themselves**. (彼等は自己を殺した、即ち自殺した)

That lady prides **herself** on her rank. (あの婦人はその門閥を自ら誇りとして居る) の themselves と herself の如きものである。此くの如き用をなす代名詞を自加代名詞又反働代名詞即ち *reflexive pronoun* (リフレクシヴプロナウン) といふ。反働代名詞は單數には終りに self, 複數には selves が附いて居る。又物主格には普通の人稱代名詞の次に own といふ詞を添へて使用する。 (反働代名詞)

第一人稱

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|-----------|---------|-----------|
| 單數 | myself | my own | myself |
| 女性 | | | |
| 複數 | ourselves | our own | ourselves |
| 女性 | | | |

第二人稱

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|------------|----------|------------|
| 單數 | yourself | your own | yourself |
| 女性 | | | |
| 複數 | yourselves | your own | yourselves |
| 女性 | | | |

第三人稱

| | 主格 | 物主格 | 目的格 |
|----|---------|---------|---------|
| 單數 | himself | his own | himself |
| | herself | her own | herself |
| | itself | its own | itself |